

義經腰越狀

座本豊竹越前少様

偉哉義臣以左以右精微を道養して日よ窮日よ究、利生民よ
及ぶどの古人の詞、むべなるかあ奢る平家を討亡し、四海納
る源氏、征夷大將軍頼朝公の、漂平こそ武將の大度と、あをぐ
され、比々文治の春の空、何の評説有べきとて、は黒書院より出
給へば、在鎌倉の諸大名残らず、伺公有所よ、畠山の重忠の所
勞のいたはり力あく、羽翼の臣本田次郎近經、君の覺へも目
出度ゆへ、御前間近く相語る、將軍仰出さるゝの、扱も九郎義
經淫酒の二ツよ其身を忘れ、奢を長ずるのみあらず、謀叛の
企致すよし先達て聞及べり、事大事よあらざる中早く討手
を指登し然るべしとて、疑有、本田次郎すゝみ出、諸歴を指

置、下郎の某言上恐れ多くいへ共、義經公の叛逆世上の取沙汰斗よて、未實否も知ざるゝ軍勢を差登されば、君の鹿忽と世の嘲り、一應も再應も虚實を糺され然るべしと、いひも果ぬゝ梶原平三、倍臣の分としてこゑやくある念ゝ念、拙者が縁類錦戸太郎伊達次郎といふ兄弟、義經ゝ傍近き出頭、委細いかれが書翰よて、天下を奪いん下心ゝ紛れなきとの内通、疑ふゝ及ばずと顔を赤めてせりあふ所へ、都堀川御所より御使者有とえらせの侍、跡ゝつゝいて立出るゝ、鎌田が後家の、貞松尼、次信が母佐藤の局、權の頭兼房腰ゝあづさはらね共、年ゝ六十ゝ餘れる老人、判官々のお使と頼朝公へお目見へゝ尾を踏心地虎の間の、廣庇ゝ畏る、本田次郎聲をかけ、遙々下りし義經公の三使、いかなる御用か覺束あし、は

口上の趣おもむき我君の御前ごまへまで、逐おのづか一いちは仰上おほしられよと、指圖さしづは三人
頭かみをさげ、主人しゅじん義經我々を指下さしくだしは段別だんべつ義もいはず、は連
枝しの中、何なんとなく近年きんねんは只御疎遠そそんがましく見ゆるは付、事を
含ふくめる徒者いたづら虚説きせつを構かまへいろくど讒言ざんげんを致いたすよし、万よろ一いちお耳
へ達たしなば御機嫌ごきげんの程いふかしく、虚名きよめいをすひらかん爲ため参
着ちやく致しはと、謹つしんで述のければ、頼朝公聞し召めい、下くだすのさへづり事
取上といふはあらね共、義經此頃このころの行跡ぎやく不審しんあきよしもあ
らず、心得こころえがたき一戀ひとこ尋たづねといん云いひ譯わけせよ、此度家來武藏坊むさしぼうを
始はじめ其外ほかの家臣かしん等、南都東大寺大佛供養だふつくやうふ事よせ、贗山みせ伏ふと成
關所せきを偽いつはり通とほりし由、扱と又諸方の牢人らうぢう者忍しのび、は堀川へ
集あつむるよし、謀叛むはんの企くはだてならせして、あらたは家來を集あるや、子細しさい
聞きんと仰有、兼房ためらふ氣色けしきもあく一いちは開ひらくべしと、二

人の老女を押退てつゝと出、武藏坊を先として御傍に仕へ
し御家來、山伏の姿と成奥州へ下りし事御咎に尤ながら、先
達て彼者共、義經公の不興を蒙り逐電せし族あれば、是以
存せぬ事、扱又諸國の牢人者忍びくゝ堀川へ參る事、少も
招き寄るゝあらず、先年八嶋、一の谷所々の軍に我君の恩顧
ゝ預る武士共、尋登れば是非もあらず、義經謀叛あき心底に、先
達て腰越より送り奉りし一書にて、宜しく御許容有御兄弟
御和睦、希ひ奉ると、流るゝ水のよどみあく理り立て申にぞ、
口かしごき兼房が一言聞入べきゝあらね共、たゞへ義
經都ゝて叛逆をおこさばおこせ、我爲ゝ大山の麓をせゝる
蟻同然、けふの使を規摸として罪を赦し和睦せん、玄かし國
家の政道猥と成、者ゝ禮義を忘るゝ、色と酒とゝおぼるゝ

故、ほのかに聞へ錦戸太郎、静といふ白拍子を養子とあし、義
經が心をうばふと聞、彼静を人質として鎌倉へ差下せよ、も
しさもあくは討手を登し都の館を踏つぶさん、胸を定めて
此返當只今せよと宣へば、兼房のはつと斗違背せば忽ち一
大事をさんなれ、一期の浮沈爰ありと、取つ置つ思案のてい、
何かな指出る梶原平三、權頭兼房、静めを人質めて義經
の科赦すど有に結構を御了簡、忝いと早速にお受申等の事、
何として遅あひる、イヤあの横着な髭親仁と、かさよかしれど
耳よもかけず、御懇志の御詮意何しよいなと申べき、仰の如
く静御前、指下しひ段畏り奉るど、いひせも果す貞松尼、こ
れく兼房殿心得ぬ早請合、家よも國よも日本よもかへま
いと思召静御前、人質どの義經公よもや承引あされまじ、女

あがら我も使の數多くいられ、なせ相談に致されぬ、受
持顔の心得ずと、聲もするどいのゝえられ、まかく太切成場
所もあり、女中の智恵も及ぶべきか、人質の昔より其例あま
た有事と、やり込れバ佐藤の局、舌長あり兼房殿、其身又疑
ひ有時の、人質の扱置怠狀誓紙も書ならひ、くもらぬ主人の
お心をやひらきと遙くと、東へ下りしかいもなく静儼を渡
せと有、お返事を得致すまい、扱誤りも成あらバ某切腹す
る斗、御両所へ難義のかけぬ、お氣遣ひあされなと思ひ込だ
る有様も、大將甚御機嫌よく、兼房が早速領掌祝着せり、則本
田次郎を請取も遣ひすべし、同道もて都へ歸り萬事汝が心
を付、愚弟が補佐をよ、くせよと慈愛も深き御仰、皆歸國と
の給ひて御座を立て入給へバ、二人の老女のむつと顔、はつ

といらへもそこく、ふつれて御前を立かゆみ、前後の首尾
を兼房の、近經を伴ひて都の、空へと、立歸る梅の難波津紅葉
の龍田、花の都の東山、お茶屋の軒の幕打せ義經公の思ひ者、
靜御前を慰よ、色香をかざる花くらべ、女中あまたの其中よ、
權頭兼房が獨娘、鵜鷹といへるえやれ者を、めいわくがらそ
ゑ共、爰あわやかり者、堀川のお館で、龜井の六郎重清様、
一か二迄の下らぬ男、したがう殿の氣短で氣儘で氣まひ
らが有げあぞや是のえたり又わる口、尤こちから惚た故雨
のふる程やるみよ、返事さへせぬ堅いお人、めつたお事いふ
まいぞ、其様よまがく、えう、隠さしやる程猶いのすど、あ
だ口ゝの其中へ、早麓迄我君のお出をえらす龜井の六郎、あ
ゆみ來るを、ゑ共、かのがそれそこへ、こちらに釋じやはづ

してやる、誰もあい間又片かげで水遊びの鵜鷹殿、ちよと濡
さえやれと言捨て皆氣を通し隠れける、鵜鷹の邊見廻して
重清が傍近く、物いひたげようぢく、とてんぼのかんで後
より、ひつたりとだき付バ、ふりはなし、これ、静機も見
てござる、中ものづいてじや、ハア、あた方にとふから御
存、おまかりのござんせぬ、あの返事を聞してたべど、松よか
かれる藤かづらはあれがたなき折から、幕えぼらせて静
御前立出給ふ躰を見て、二人のはつと驚けバ、これ苦しう
ない重清殿、先達て鵜鷹の咄し折もあらバ自が媒せんと思
ひし所、けふ幸の新枕兼房へ我君から、娘を龜井と女夫よ
せいと、つゐ一口れつしやつたらさらりつと埒明事、其氣遣
あら静が請合、誰もない間、うたか、指合の出来ぬ中、

どかしやとの給へば、（さ）あのやうな静様がお世話おさるゝ
手前も有、ちやつとごんせと手を取て、いやおふいのさぞ引
づられ是非（せ）なく幕へ入ふけり、暫く有て先走殿のお入とま
らす中、大將九郎義經公大廣袖をたぶやかに、内大臣宗盛が
湯谷を愛せし奢（おごり）のとく、車やどり馬どゞめ爰よりかちの花
見酒、錦戸伊達を御供よて、まづく、歩出給へば、静御前（しづみ）のね
傍（わき）に寄、私（わたくし）を先へおこして置いて、今朝（けさ）程々待兼しは何とてお
出の遅（おそ）かりしぞ、お道草の隙入かど、恨給へば、（うらみ）ちつとの間
傍（わき）に居ねば、もふは機嫌（きげん）がそこねる、またが道をも折えり顔
は咲乱（さか）れたる櫻を見ても、そもじの姿とくらべて見ればい
つかなく、（ナント）汝等もそふに思ひぬか、いか様君のおつちや
る通自慢（じまん）いたすじやおけれ共、娘が器量（きりやう）は氣をのまれ、けふ

花めがまほれて見ゆる、弟、まほれた段か櫻めがまよげ
ま成、見すぼらしう見へますと、何があお氣を入かり立か
りたる追蹤つしやうの、見苦くるしくも又いやらまじ、折から薩さつの方よ
りも、チ、イ、と女の聲、誰あるらんとふり返れ、バ佐藤局つはねと貞松ていせう
尼、足を空まかけ來り、堀川のお館へと心せく道すがら、花見
の御遊やうと聞たる故すぐは是迄來りしが、一大事こそ出來れ
と息いきつぎあへぬ二人が面色、何一大事と心得ず、子細いか
よと錦戸兄弟問かくれば詞を揃そろへ、此度の鎌倉下向の義經
公のお身の上、誤りなきや譯一と言上またりしが承引せういんの上
願朝公の仰おほしは、靜御前を人質じちと渡せよとの御難題、我々の
吞込くみこを御返答も致さぬ中、權頭兼房殿いかよもお渡しすさ
んと御前みまへよて慥たしかの受合則お傍たがひに居ゐせし、重忠の郎等らうどう本

田の近經、御迎ひの役をうけ同道よて登し故、栗田口を我
のかけぬけての御注進と、いひも果ぬ人ゝあされ果たる
斗へ、靜御前の涙よくれ、自を遙くの鎌倉へ下すとや、君と
國との爲ならば唐高麗へ行とても、いとふ心のあけれ共御
得心もあされぬ上、無鉢は引分送るといふよくお兼房殿、
何ほでも我君は離て東へ下りなせぬ、了簡付て給れとす
がり歎かせ給ふもぞ、伊達錦戸の兄弟は是ぞ幸兼房を、追退
けんとすゝみ出、氣遣ひ有な鎌倉へ下さぬ、君まろしめさ
れずや、さいつ比々頼朝公、専色を好給ひ女を集給ふと聞、靜
の器量を聞及び人質も事よせ、誠の妾もなさるゝ工面、兼
房めがたらし込れ、まいあいの鼻薬で請合たゝ極つたと、事
がなふゑの讒言も、義經甚せかせ給ひ、よくつくいやつ、兄頼

朝が辨舌ばんぜつも乗られ、我寵愛ごうあいの静を人質も渡さんとい奇怪きくわいなる
耄おひほれめ、さやつも追付歸るゝ必定ひつちやう、有無うむをいせす討捨うちすてよど、
以の外ぐわいいからせ給ひ、静こあたへふたりもこいとお茶屋
の、内へ入給ふ、跡も兄弟身掙せしらへ數多あまたの家來を捕手とりての手くバ
り、ア、ア、向ふの人聲こゑの兼房めと覺へたり、去あがら年寄ても大
抵ていのやつならず、油斷ゆだんせば仕損しそんぜん、ア、岩かげも隠れ居てや
り過し繩なはかけん、必ぬかるな合点ごうてんと、點ちまつき合て大勢おほし、小かげ
も忍び居たりけり、かく共えらず兼房の、鎌倉を歸りがけ、君
の花見を聞付て薩さつも本田を待せ置、子細を言上ごんじやうさんと歩
來るをやり過し、捕とつたとかゝる雜人ざにん原、引ばづし利腕取きりうで、シり慮りよ
外ぐわいある下郎めと、二三間投のくれ、残る雜人ざにん騷立さうたて一度もか
かるをこと共せず、片端かたはし、擲つんでゐのころ投、命からゝ、岩角

打付られし躰を見て、錦戸兄弟舌ぶるひ、薩をさして逃行を
何國迄も追かくる、と待くと龜井六郎お茶屋の内方す
すみ出、兼房科の心よおぼへあらん、上意を受けて縄かくる
異變あらば首よして、御前へ伴ふ覺悟めされ、何某を面縛
せんとや、面白しく、やみく縄にかゝるまじ、いざこいや
つと我強き老人、するりとぬいて待かくれば、是非あく龜井
もぬき合せ、秘術をつくす若手の働、權頭も古兵火花をちら
し、「切結ぶ、鵜鷹に見るよりのふこれ待てと、どめてもとまら
ぬ太刀さばき、詮方つきてお茶屋の切戸引ばづしてふたり
が中、拔身をいとみまわけ入、龜井のいらつて、女房親を
かばふか不忠者と、聲かけられて涙ぐみ、夫よ見かへて父上
をかばふでいなければ共、いふ事いにして下さんせと、歎くを

兼房聞どがめ、^調心得ぬ娘が一言我夫どい誰が事、サ
いと其譯、常々おまへの目を忍び六郎様を戀こがれ、み玉
づさで契りし、今日といふ今日静様の御媒^{あかづは}よて夫婦の盃、
^調重清と女夫と成たか、^ホ静^{シヤ}は前の仰よて力なく縁を結ぶ、
其元と繩をかけ引立來れといかり、縁あれバ猶用捨あら
ずと、斷聞^{ことわり}て兼房の何思ひけん拔^ぬたる刀、すぐと弓手の脇腹
へぐつと突^つ込^こ引廻す、ナ情あや何事と娘の取付半狂^{きやうらん}乱、六郎
も驚きながら、^調何故の御生害^{しやうがい}、縁組せしを不足^{そく}よばし有て
の事かと尋れバ、色も變^{へん}ぜず、七十ちかき今日迄、娘と聲を取
兼しが、六郎を夫と持たの出かした娘大きお手柄^{がら}、縁有ゆへ
と赦^{ゆる}されずと義を守つたる今日の働^{はたらきあつ}、天晴古今^{たれこゝん}の聲を取、嬉
しい余りの切腹、引出物の忠義の一句、代々源氏と仕へる某、

靜は前を鎌倉へ渡さんど請合し故御咎と覺へたり、是非もあや運の末、此度の鎌倉下り疑ひふから頼朝のお心、人質として靜を渡さば、中和睦有べしとの難題、いやといは、早速、大軍を以て責來らん、我君色迷ひ給ふ故、數多の家臣が取らば、諫兼たる靜御前、引分て東へ送らば、身も納り一ツの又親と名の付倭人の錦戸兄弟、自然とお傍を遠ざからん、彼是以て國家の爲、もし得心おされずば、病氣と云のばし、隙取内まづかりと味方の臍をかためん爲、扱こそ請合、立歸る、といへ不興を受たる某、何をいふも甲斐有まじ、殊も一旦武士の約束、今さら何と云譯も頼朝公へ切たる腹、此詞を能守り、二ツ取もの人質をすめられよ龜井殿、頼むく、と今迄、忠義忘れぬ心の丈夫、娘の余りの悲し

さゝ物も得いぬずえやくり上きへ入、斗ゝ歎きける、六郎も
目をまばたき、調とても此深手ふかまで存命ふくめいの叶ひがたし、譲
り置るゝに遺言いごん宜よろしくはからひやべし、に心安かれど涙な
がらゝ老人の、心をやぶらぬ一言を、嬉しげゝ打點頭うなづき、重かさね
祝しうちやく着せり、此世ゝ用なき某、聳身むこしうとの盃ゝ御苦勞ごくろうあがらに介錯かいしやく、
聳殿頼むと、合掌がつしやうすれ、調いや其義の御意ゝそむく、譬たとへお呵受しかり
るとて拙者ゝ討とぬ曲まがもなし、然らば娘、儕を頼む、是程め
でたい、婚禮こんれいゝあせ泣ぬるぞ、ほへあやい、苦痛くつうさすか、不孝者ふかう
早ふ父が首を討、エ、つがもない事おつえやります、何ぼ孝ゝ
成とても勿躰うたない親の首、そればつかりの赦ゆるしてたべ、お留る
主の内ゝ殿座を持お歸り有ては機嫌きげんが、そこねもせんかと
案ぜしゝ悦び給ふが猶悲しい、えかられてもたしかれても

助らるゝから助てたべ、我夫やいのと伏まろびあやも、涙の悔泣、めろくどほへづら、今も本田が來りて、此兼房が犬死、泣事いあい、といひつゝ、親子一生の別れと思へば目またまる涙隠して居る内は、籠々來る人聲、本田が迎ひ事急ぐ、とても未練、兩人介錯頼まじと、突込刀取直しうあじゝ押當ゑいゝ聲、我と押切覺悟の臨終、首の前より落てげり、娘の死骸いだし付前後涙と取乱す、龜井六郎涙をおさへ、女房泣て居る所でなし、こゝたへ來れと死骸を、かゝへ立上れば、鶺鴒も詮さき父の首、かきいだし涙あがらもかいゝ敷、打連てこそ入ふけれ、程なく來る本田次郎幕のこゝたに立休らひ、契約有し人質靜江前を渡されよ、お迎ひの爲、是迄推參、兼房のおいせぬかと高聲と呼べるもぞ、お

茶屋の内より對の六尺靜は前の乗物を櫻の木かげより昇すゆれば、引つゝいて龜井六郎禮義たゞしく兩手をつき、聞及ぶ本田殿遠路のは迎駕は苦勞千萬、兼房がお受やせし人質、義經公もは許容有てお渡しや靜は前、お受取下されど慇懃は相述べ、早速のは得心、は連枝の中睦じく、は代長久の基ぞや、慮外あがら作法の通り改めの爲お目見へど、立寄て乗物の戸を引明れば靜はあらで、兼房が白髪首三方に乗たるのこのそも、いかよと驚きしが、扱ひ義經得心あきゆへ義はたくまじき權頭、鎌倉への云譯は切腹せしか残念や、かほどせつある志無下まいいかであすべきと、戸を引立て龜井に向ひ、鎌倉の殿中にて申請たる人質、請とらずと沙汰有ては頼朝公の詞も立ず、所詮此首を靜は前として請取

歸り、主君の^に前は、繕^{つくろ}ふべし、世間のやつぱり靜に前受取た
分渡した分、世の^{つし}愼^{しん}が一大事と情もこもりし一言も、龜井六
郎はつと感^{かん}じ、こ^の忝^{かたじけ}なき裁配^{さいはい}、いかにも邊^{へん}推量^{すいりやう}の通早岨^{とほさき}
道より女中を引連、我君諸共御歸りなれば、差^さ當^{あた}つて當惑^{どうわく}い
たす、まら^の白髮^{しやうはつ}首靜に前として御請取下さるゝ、鼻^{はな}
が^も立拙者が悦びいか斗、萬事貴殿の御働宜しく頼存る
と、勇士^{ゆうし}と勇士の詞話^{しごわ}、氣遣ひ有る鎌倉の、御前の拙者も任^{まか}
されよ、早お暇^{いとま}と目禮^{めらい}の、互^{あひ}まつゝむ一大事、い^のす語らむ六
郎に立別れてぞ入^いける、本田の龜井が忠臣を深^{ふか}く感^{かん}じて
立たる所へ、伊達次郎家來引具しどつと駈^{かけ}寄せ、御寵愛^{ごちゆうあい}の靜に
前無^{まへ}躰^{たい}も召具し歸るとて歸さふか、此方へ戻せばよし、異義^{いぎ}
も及^{およ}ば、本田次郎置みやげも首を取、返答^{へんたう}せいとさめかゝ

れど、ちつ共騒がずからくど打笑ひ、簀虫めらがほざいたり、頼朝の御説みて請取たる人質、渡すまいが何とする、し物にいすお討てどれ、畏つて大勢がつぱあのはささと抜つれて切かくれば、近經もぬき合して切まくれど、猶もさへへる雜人原、龜井六郎踊出、手比の櫻木えいやつどぬくより早くかたつばし、ばらりくどあぎ廻れば、さしもの大勢さへ兼、空まゑられぬ雪あられむらくばつと逃ちつたり、透を窺ひ伊達次郎家來横淵藤次を引連取てかへし、藤次靜に爰も奪ひ返せど、主従立寄乗物の、戸を引明て、どう玄や、兼房めが白髪首、あたいまく、えい老ぼれと土足まかけて踏ちらど、後の方より龜井本田關羽張飛が怒れる大聲、それ見付たら敵されずど、走來る勢ひまかへす詞もあまくら

者、かいくいつて逃行へ、横淵の途を失ひうろたへ廻るを本
田次郎、飛かゝつてはつたと蹴たをし足下ふまへ、是非
もあやもふ叶ぬ、鎌倉に梶原といふ倭人、錦戸兄弟と縁
有やつ兼ての内通、今日の此まだら注進するに必定、さすれ
ば是が天下のわれゆ、必恨めさるゝなどゝがり切たる詞誥、
ニテ何とせん是非もあし、かさねて互の對面いさぎよく戦
場ゝて、げもく、其時節、もどのおこりのいつが主、下郎
あれ共互の血まつり、いざ半分づいてもたれよと、本田龜井が
兩足を、ひつぱり殺しよまん中より、引ちぎつたる有さまの
心地よくこそ見へよけれ、義を見ていさむ二人の勇士、敵味
方どへだれど、心いどけあふ、義者勇者、忠義をみがく誠の
たましめ是、神國の大威徳、文道に名も高く、くうもくたも

んぞうちやう持國帝釋天、毘沙門天の忿怒の相、ぐんだりや
まやのあれたるいきほひ、花ふみまたく東山、峯のあらしや
谷の水かうくく、降三世二王の、あらび立たるごとく別
れて、こそい立歸る

第二

神の人の敬ふよつて威をまし、人の神の徳よる、近江の
國栗太郡水府神の縁日と上下ざいめく海道よ、樽を枕よ餘
念あく浮世を夢と飲くらし、世をへつらぬ曲者有、元來弓
馬の家よ住孫吳が術よ達せし故、近郷他國の大名より軍師
よ招き給へ共、生國はかれ此邊よ刀を鑿と鑑子よかへ、目貫
の職を仕あらひて酒より外よ主あしと、飲で明して行倒れ、
月よ三斗でたらざれば五斗兵衛といひはやす、神參りの貴

賤立集り、此醉どれい退分の目貫師五斗でないか、扱も
飲だの跡の村から酒の匂ひ酒屋が有かと思ふたら此わろ
こちらが目あらひ人であし、よう見て置とはねばしの跡か
ら来る上戸仲間たべられてこのもしや、とても吞あらあ
れ程又吞であければ人でなし、皆も見ておきやあやかり者
と譏ればほむる参れば下向、行つ戻りの口ずさみ是も縁
のはしあらん、暫く有て庄屋年寄いかつがましくかけ來り、
往來の道をふさぎ狼藉なくらひどれ、鎌倉の上使本田
次郎近經様のお通り、起上つて片寄どゆすりわめけば大あ
くび、頭も上ずのつとり聲、れんどん、やかましい、鎌倉の上
使が何ぞや、此男の忝くも都の土地に住おれし、義經公の
領分の職人、頼朝殿の關東の將軍鎌倉でこそ大事の殿様、都

者へちまのかい、上使でも本田でも片寄道理みぢんもお
じやらぬ邪じや広ひろなならバそつちからよけて通つて貰もらひまゑ
よ、あつたら夢を見残したと足あげ出すぞんざい者、引ずり
起おこしてぶてたゝけと騒さわぐ程ほどなく近經きんけいのヤレ待まちさはせろ問事もんじ
有あと乗物つらせ、まづくどあゆみ寄よ、ヨリヤク賣人ばいじん、義經公の御
下都の土地に住居すれば、鎌倉の某に禮義せぬとの云分一理
有去ながら、ア乗物にお渡り有あ義經公の思おもひ人靜御前、ど
りこと成て鎌倉へお下り、汝が敬うやまつふ義經公の御臺みだい同前の靜
御前立上つて三拜さんはいせよと理を理でおさゆる一言、はつと
驚おどろむつくと起おき、乗物をためつすかめつ近經や家來が顔を見
廻まわし、くせくら笑わらひ、同世まう末世せに成て侍もうそつくの、よ
いかげんもおあふりあれ、其手いたべぬと又ころりねるを

ねさせず本田次郎、静殿と聞ながら禮義もなさで尾籠の
振廻、其上武士を偽り者となくんたい成愚人めど、さめ付
れば色も變ぜず、ただけうとい偽りの、あの乗物の中なが
何の静に前化者でがなござらふと、いふもえせ者とふも片
意地、供する某さへ見違へぬ静に前を偽者といふ子細
い何と、それ程聞たか申て聞ん、惣じて人よ五運六氣とて、
五臟六腑より出る息引息、聲あうして物賑はし、然るゝあの
乗物、自然と日のめの指やううそく、は自分を始二合半の髭
奴迄五音の調子のいまし、某が目や耳よゝゝつかい坊
主のあい、葬禮を見るやうで生た人とい思われぬと、見通す
とく云立れば、さしも明智の本田次郎、返答もなく口ごもり
やゝ打守りぬたりしが、扱ひ儕都の様子傳へ聞しやつな

らん、助置ての後日の妨観念せよと切かくるを、枕の手樽で
はつしと受とめ、一はねはねて起上り、五斗の前後又眼をく
ばり心ゆるさぬつら魂本田の少もたるみを見せず、きやつ
生捕てみやげません、家來共、繩をかけよと下知すれば、承
いつて兩方々捕たどかゝる二人が肩口兩手は搦んで車投、
跡よりかゝるを蹴飛ばし蹴かへしあたりをもらんで二王立、
又一時又立かゝるを、本田の聲かけをまばらく、手あみ
に見へたり家來共慮外すなど遙に遠ざけ、うやくまぐ草
むらに手をつかへ、ふしぎ成かお貴公の詞、成程乗物に靜に
前もあらず、五運六氣の考我、式の及ばぬ所、猶も心を引
見ん爲家來よいひ付ぶ骨の重まつびらく、それ又付お尋
す度筋有、いかりを休め下されよと、いふよこきたる胸やす

まり、笑顏えんがほ作つて是は、く、慇懃りんぎん千万な、たつた今迄殺さふ
の、イ、縛しばれのと有た私、尋たきとい何事でござりまそ、いや、
、コ、砂すなでお手がよこれまゑよお上、く、といふ、近經近く指
寄、お尋もとず、余の義ぎあらず、此大津の追分、今井家の、
人藤原氏の何某武門むもんを遁のがれて町家、住目貫細工を家業かぎと
して、世の轉變てんぺんをよそ、見て嘲あざけり暮くらし給ふ由、然しかる、最前さいぜんを
貴公の振廻ふるまひ只人とい思ひれず、もし左様の、方あらば主人
頼朝數年の懇望こんぼう、早、鎌倉へ下向有て三軍をつかさどり、頼
朝が師範しはんと成士卒しその力を助給ひ、關東くわんとの大小名、蜀しよく威ゐ
信しんを得たる悦び、又某が面目めんめの林相女りんしやうむすめが使ふも、さつたる
忠義ちゅうぎ、偏ひとへ、願ねがひ奉る、頭を地、付頼たのみぞ、五斗の始終しじうとぼけ
顔かほ、是は思ひも寄ぬ事、成程拙者せつしやも此大津で、職人しやくじんの職人しやくじんさ

れ共氏素姓すじやうの所有者でもなし、もと小相撲こまきも取し故、表裏ひやうりで人も投た物、手の筋から見あらひ陰陽おんやう師しの口眞似まね、あふた時のふしぎ合ぬ時のまいす仲間、藤原氏の軍師のどのお目がねが三五の十八、合ぬまよざいの内からも我等が藝げは酒呑む事、盃さかづきの相手あらいつく迄も参りませう、外の事はお赦ゆるしきされ、やくだたいもあい事又隙入ひまて日がたける、神参りのついでどくる方を廻り宿へ戻つて又酒さけふ、暇申ひままうといひ捨て禮義もそこへ立上り、行をしほしと呼かけても、耳にも入らず足早に明樽めいぞんかたげて走行、三徳兼備さんとくけんびの武士ぶしも世をかざらぬ、是非せひあしど、跡見送つて本田近經、正しくかれが今井兼かね人じん、此大津は隠れ住目貫師しとい思へ共、氏を隠せば力あく殘念ぞんねんあがら行所へ、十三四なる小若衆せうしゆの、町人めさしそぞ袖ふ

おしよぼからげの小りしく人を尋る目はうるく、近經
も立向ひ、同申お侍様、此道筋もしやまあ、四十斗お男の酒
も酔よて行たをれ、寐て居る人はなかりしか、見給はずやと尋
れば近經の胸もこたへ、同四十斗の酔よたんぼ見た共く、そ
ちが尋て何用有と、脇道から問かくれば、同其人は私がとし
様、ふ斷酒が好物で、朝から晩迄酒びたし、きつう酔ていたの
ひあく、山でも谷でも道なかでもねる事がお好すき、けさからの
神参り今もお歸りなされぬ故、氣遣ひさふ方々尋さふらふ
と語るを聞て近經は、扱あかれが悴せがれよな、だましすかして名
を聞んと、笑顔作つて聲やさしく、同何其方が爺親おやとや、若いよ
似ぬ親孝行かちきどくく、うれならそちが爺親の樂人か、ハレ浦
山しい境界、所業のあいかな何とあやかり者じや聞たい

と問^とれて何のぐはんぜあく、商賣^{しょうばい}の目貫細工彫^{はり}物師^{ものし}の五斗兵衛私^しが名^なの大三郎^{ださんらう}、すりや追分の目貫師^{めくわし}か、然らば以前に今井^{いまい}牢人^{らうじん}藤原家^{とうげんけ}で有^あふがあと、問^とれてそふといひんとせしが、常^{つね}に父^{ちち}が氏素性^{すじやう}むさといふなと云付^{いひ}を、爰^{こゝ}ぞと思^{おも}ひがぶりふり、^調い、そんな人^{ひと}でいなし生^うれからの職人^{しやくじん}、さうんき事^{こと}問^とす共^{とも}ども様^{さま}のござる所^{ところ}、早^{はや}ふ教^{おし}へて下^{くだ}さりませと、紛^{まぎ}らす詞^{ことば}聞^き取^とて、扱^あころと心^{こゝろ}は點^ち々^ち、父^{ちち}が有^あ所^{ところ}教^{おし}てくれん、其^{その}目貫師^{めくわし}の五斗兵衛^{ごとうべいゑ}、醉^{すゐ}狂^{きやう}の上^{うへ}に某^{たれ}へ慮^{りょ}外^{がい}を働^{はたら}いたつた今^{いま}眞^{まこと}二ッにぶち放^{はな}した、汝^なの子^この役念^{やくねん}比^ひは跡^{あと}吊^つふてゑさせよと、誠^{まこと}しやか^{いづは}に偽^{いつは}れば、大三郎^{ださんらう}の件^{げん}天^{てん}し、何^{なん}ども様^{さま}を殺^{ころ}したとや、それ誠^{まこと}か悲^{かな}しやと、わつと斗^{たたか}ふひれふして、前後^{ぜんご}、涙^{なみだ}よくれけるが、目^めを押^おぬぐひそつくと立^た本田^{ほんだ}が指^{さし}添^{ぞへ}ぬくより早^{はや}く、親^{おや}の

敵覺へたかど切かくるを引ばづし、利腕取て膝もひつ敷、用意の早繩手ばしかく猿轡めて聲をどめ、其性根を見よふ斗子細の道といひ聞さんど、乗物引明むり無躰大三郎を押こんで、コラヤ家來共、心入有一刻も早く、急げと本田次郎跡もひつ添いつさんゝ鎌倉さしてぞ、「立歸る東路ど、都を爰も追分や、大津八町ゝ隠れなき五斗兵衛が住家ゝ、息子大三が見へぬ迎二親の歎きをさつし、わたり邊が云合せかへせかへせの日數も立、鉦や太鼓の音もくもり、哀も又物すこし、主五斗の未明より迷ふ我子の行方を、尋あがらの神参り、妻の關女の留主の内三社の棚へ燈明をともして俱ゝ立願を、かけがへもなき男の子、行衛を祈る神たゞき、娘徳女が心へて、はらひ清むる鹽水の心も清くまほらし、徳女、今さら

いふでいあけれ共、夫五斗殿より大三といふ子の有事を知あ
がら、そなたをつれて嫁入し、ならぬ中より大三も育そだて、牛馬
もふまれまいと思ひがけなき災難さいなん、あさぬ中より取分て
義理、そまつとして失ふたかと、未み來らいよとさるお袋の、草葉の
かけから思し召も耻しいと涙ぐめば、おとなしく、調かゝ様
常つねにお前が兄様を、太切たいせつよあさるゝといと様もよう存
じ、殊ことはあれ程近所の衆や、どゝ様迄方々と尋よお出さ
れた物、つゐ連ましてお歸りあされふ、ぐどゝ思ふて此上
は、煩ふてべし下さんすあ、ほんに目脚あしも晝ひる近く、皆お歸りを
待ままよと、母ちからは力を次の間へ、しほゝ立て入ふけり、折か
ら來るの關女が兄ねち掄がね金門入とて、所で名うてのいがみ者、門
口からどす聲よて、くらひとれの内よあるか、門入が逢よ來

たと、あがり口ゝ大あぐら、コイヤい妹、此月のさし入ゝ去歴れきから頼まれ、詔あづからへて置た百疋ももろ猿の目貫、手付の金に先へせしめて、目貫を今ゝ渡さぬぞよ。イヤおれが先様へどふ立物ず、けふの内ゝじやがひでも、埒明うちあけゝやきかぬ門八泥坊どろぼうめりどこへうせた、引ずり出してちやつちやと逢せ、但へたゝするのかと、わめけバ關女うしなのむつと顔顔兄様兄様、こあたいの、こちら大事の息子を失うしなひ細工所でないわいの、ポンぬしがあれ程ゝ好きな酒さへ一滴てきも咽のどを通さず、泣暮すを笑止せうしがり、近所のお衆が手分して返せ、の太鼓鉦がね、其耳へ入ませぬか、こあたの爲ゝもいのゝ甥子おひこ、俱ともに尋ゝあるいた迎、笑ふ者の有まいと。聞て門八ヤ爰なそげめ、あの小悴こせがれが見へぬ迎おれが何の悲しかる、そんな詮義せんぎゝやこぬはいや、目貫が出来ず

ば手附を戻せ、あた面倒あときめ付る、^調其金が今時分迄有
物か、大三さへ戻つたらつぬ出かしてやりませう、ふ宵^{せき}あが
ら待て下され、^調扱もぬかす事が皆どろぼ、いつ戻ろやら知
ぬがき、それがどふ待れる物、よい、^晩晩みきてくらひどれ
ど、指向ひは埒^{うち}明る、あたはこしもないすりめよかつて、脚^{すね}
も雪踏^{せうた}もたまらぬと、わめきちらして歸りけり、關女はほつ
とため息を、つき語^{つめ}たりし女氣の、跡打ながめ、居る折から、五
斗兵衛はしほくど、打しほれたる案じ顔、尋よあるきしか
いもあく、けふもすくく立歸る、^調こちの人戻らぬやんし
たの、まだ有家も知ませぬか、様子はどうじやと尋れば、^調カレバ、
もしや狐^{きつね}の葉^{わぎ}でいかにいかに、いかり山を一遍^{べん}さがし、戻りが
けよ藤の森、狼谷^{おおかみだに}から六地藏を、堅横^{たてよこ}十文字よ尋ても、知そふ

あ手がよりもおじやらぬ、近所の衆から便りもないか、どこ
も迷ふている事ず、いちらしやふ便やど、涙もひせふないじ
やくり、夫婦が悔ぞ道理なる、折から表へ笠ふか、只者あ
らぬ侍の、供をも連す只一人用有げぬ指のすき、目貫細工の
彫物師五斗殿の住家は是かと、編笠取て内へ入少詵度目貫
有て、堀川の館々、泉三郎密に推参致したり、は免有と座も直
れば、五斗の驚手をつかへ、是は用とあらばおやしき
へもめし寄られず、は大身の見苦しい、此あべらやへは出の
段、細工冥加も叶ひしやど、頭をさぐれば是はめいわく、詵度
とやの目貫かたし、何ぞぞ請取下されといふも五斗の不審
顔、惣躰目貫の一對の物、それよかたし頼むといふ、聞へた、
初めどうらんのこはせまでもなされますか、左もあらず、

此度主君義經公の鎌倉の將軍頼朝公と梶原が讒言^{ざんげん}よて、御中ふ私^わに成給ひ、近々大軍向ふよし、親兄^{しんけい}の禮有^れべ、一先都を御開^{ひら}きとすゝむれ共、罪なきは身を落行給ひ、返つて誤り有^あり似たり、思へば弓矢の勇もなし、所詮^{しよせん}鎌倉の大軍を引受、勝負を一戰に定めんと、評義^{ひやうぎ}一決せし所、すゝの合戦^{くわくせん}も及ん時、搦手^{からめ}を守る目貫^{めくわ}のわれ共、肝心^{かんじん}の表道具^{おもて}退手を守るよきかたしの目貫を頼細工人、貴殿ならで外^{そと}もあし、領掌^{りやうじやう}有て退手をかため、目貫を請取^{しと}、士卒^{しそ}の力を助てたべと思ひ入て願むよぞ、五斗の暫し返答^{へんたう}あく、差^さうつむいて思案^{しあん}の躰^{てい}、女房何の氣も付^あず、とふやら是^{こゝ}にむつかしとふか、詔物^{あつらへ}、なみ大抵^{たい}の直段^{ねだん}で、出來そむあいと夫の顔、そろばんやろゝと指のぞく、五斗兵衛のとつづ置つ、^{こゝ}は太切^{たいせつ}なる詔物^{あつらへ}、品よよつて

頼まれん、爰に端近奥の間で、細工の模様、貴殿の物好承ら
ん、イヤこあたへど立上れば、ア扱の御許容有べきやと、泉の波
は漂ふ思ひ、磯も付ね返答を、こぎおふせんどかい立て、打
連てこそ入みけれ、女房の一圖は細工と心へ、サア仕合が直つ
てきた、此きはひも大三も戻らふ、首尾いどふじやと奥の間
を差のぞいて、立たりぬたり耳うば立る表の方、いつ聞な
れぬ轡の音、又人こそと見る内も、十四五ある少人の上下大
小さいやかみ、銚立たる乗馬もまたがり、こちらの内を目宛に
くる、慥息子の大三玄やが、サモようまたと詠る中、門口に馬
乗放し、コリヤ家來共、今少隙入の用事有、町はづれに待て居よ
と、下部を遙に遠ざける、物ごし違ひぬこちの息子、さも有ふ
しごあ形恰好、うかつは詞もかけられず内方そつと差のぞ

き顔見合それバ、^調かし様お久えうござりますと、聲かけられて飛立斗り、うりやこそ兄の大三であつた、ほんゝそふじやと、顔あがめ、^調其姿のどふした譯、^調よう戻りやつた息災でど、嬉しさ餘り詞さへまどろゝ成て尋れば、^調目あれぬ姿御不審の尤、いつぞやと様を勢田へ尋て参つた時、本田次郎近經殿又出合、無^調躰又東へ連歸り、今での頼朝様又御奉公、それ又付ども様へ將軍様から此狀が参つた、お目よかゝつて見せましたい、奥又休んでござるあらそふすて下さりませ、^調それから出立が立派お筈、主又見せたら^調應悦び、^調と手を引門口をくぐるのれんの薄^調けれど、恩愛あつた親と子の悦ぶ聲を聞付て、五斗の奥を走出、^調兄又戻つたか、よい侍も成たか、親より生れまされた、したが今頃への咄しららと

聞たが、本田といふん、いつぞや勢田で逢た侍、成程く、それのそふじやが、頼朝様から此とへに狀とい、吞込ぬどれれど、いふよ大三の懷中^{くわいちゆう}の中、うやく、まゝ文箱を出し、御用の譯^{わけ}の直筆^{ちくひつ}よて、委細^{いさい}認め置れたりと、父が前よ指出せば、何事かといと封押^{ふうおし}切くり返し、讀終^{よみおひ}つて押いたいき、嘆^{かな}も大三も聞てくれ、鎌倉から此とを御家來^{ごけら}よかへたい、悴^{せがれ}と同道鎌倉へ下り奉公するなら、十萬石の大名よせうと有御文章^{ぶんしやう}、忝^{はづか}い事ではあいか、うこなたを大名よや、有^あがたい仰じやの、そんならわしの御前様、此子は若殿、娘は姫君、此上の出世はあし、一時も早う取急^{いそ}ぎ大名よ成て見たい、旅用意さつしやれぬか、それく、是程有難^{がた}い將軍の仰、何のいやと申さふ、したがあちつと譯^{わけ}有ば、こちとらは二三日跡から行、そ

ちハ先へ立歸れ、上意をお受申せし印、恐ながら返翰せん、
女房、硯と紙をと押直れば、あいと心へたんずの引出し、尺長
を取出し、夫又渡して我子の傍、大三、此やうな仕合の寐耳
へ水といはふやら、是も偏又そなたのかげ、子とい思ぬ氏
神と、手を合すれば勿体あい、皆と、様のおかげゆへ、私共迄
思ぬ立身、お前も囁嬉しかろ、嬉しい段か、あんまりで夢
でないかと思へる、人の果報の付時と、夏の日の夕立、
何時で有ふも知ぬと、むつまじげなる其隙、五斗は返事書
認め、文箱又封印しつかとすへ、大三、少しでも隙取へ君へ
對してふ患の至り、随分道中心をせき、早立歸れと狀箱を、渡
せば請取懷中し、然らば私にお先へ下り、お請の様子を我君
へ申上、此お返事を指上せよ、囁様跡から、爺様や妹と一所

よお下りなされませ、ほんよあんまり嬉しさで、妹よ逢する
のをばつたりと忘れた、戀しがつたよ立あがらちよつと呼
でと立上るを、^同近い内一所へ寄集る親兄弟、二日や三日遅
いとて顔のかゝる事もあい、^{いそ}急げくよ力あく、そんならそ
あたゐもういきやるか、こちらも^{いそ}急いで追付まゑよ、まめで
と門口を送り出、^同こちらの息子の大三のお立、家來共さ、^{いそ}は
家來衆、早お歸りと呼べる聲、そりやお立よとつめかくる、^同囁
様さらば、早お下り待ますと、よつと笑ひ^{いそ}暇乞、別れて大三
の立歸る、跡見送りて、母親が、誰を相手の自慢口、^同器量なら
骨柄^{あら}から^{あつた}適の侍、^{サア}くこちらの人、職人もけふ限り大名の下を
しらへ、そろくゝまたらよからふと、いさむ女房かまひぬ五
斗、佛壇へ押直り何やら書てはりかける、まやうごゐ三つ地

大ながし、南無あみだ佛、あむあみだ佛迄聞き女房の、鐘木も
ぎ取^{コリヤ}何ぞ、ふひさきの有大事の子、いまゝゝゝゝゝい俗名五斗
大三郎、ぼだいの爲と書付て、念佛すの何事と腹立、聲も涙ぐ
む、^コ様子えられねば理りぢやが、鎌倉へ歸るや、いあや、とふで
も大三の死るのやい、ヤそりや又なせよ、それ知あがら追戻
そむどくえん、追かけて呼かへそと、かけ出るをえつかと捕
へ、^{コリヤ}待子細をいふて聞せん、奥もひかへし泉三郎目貫を誂^{あつら}
るとい偽り、誠に此度義經公、は兄弟の^中不和と成、近よ
軍始る故某を味方と招き、一方をふせぎくれよとのお頼、我
いよしへい木曾の浪人、同じ源氏の末ながら、頼朝の仇有
家筋、先祖の恨此時と思ひ義經公の味方畏つたと請合し
其跡へ忤^{せがれ}が使鎌倉と我を懇望、いかん忤^{せがれ}が爲じやとて一旦

武士の契約今さら違變成べきか、此譯を忤ふ語らんとし思
ひしが、きやつも我忤、大事の使を仕損せしと、切腹するに知
た事、若木の花が目の前で死るのを、親の身でまぢく何
ど是が見て居られう、追歸さん斗ふ偽りいひしを誠と思ひ、
いそぐと立歸り、將軍の幕下ふ付事、罷ならぬといふ返翰、
頼朝へ差上なば、手討ふあふか切腹か、生て再び戻らぬ忤、今
別れたが一生の顔の見納め生別れ、死だと思ふてする回向、
おしやふびんど斗ふて、さしもの五斗のせきのぼす、胸ふ涙
のこらへ兼わつと斗ふ、泣むたる、様子を聞て妻の關女涙と
俱にくどきごと、扱悦びと悲しみの是程早ふかゝる物か、そ
ふ有ふとい夢もゑらず鎌倉へ下りあば、五斗殿の若殿よ、
お世繼様と大勢が、敬ひかしづくわの子の威勢、見る嬉しさ

いにかあらんと、樂^{たの}しみしかいもなく死るとい情ない、うれ
知^しちがらつきはあし一人戻す侍の、道といへどあんな
りじや、むごい心と斗^むよて正^{ただ}躰^た涙^{なみだ}ふし沈^{しず}む、こりや、
女房奥へ聞^{きこ}へる、未^み練^{れん}へと三郎が、心の嘲^{あざわ}り恥^はしい、泣^なな
といひつゝ、こぼるゝうき涙^{なみだ}かゝる哀^{あはれ}を汲^{くみ}分^{わけ}る泉^{いづみ}の襖^{ふすま}押^お明^み
て、様子聞^{きこ}共聞^{どもきこ}ぬ顔^{かお}さあらぬ躰^たあゆみ出^で、始^は終^{しう}奥^{おく}よて談^{だん}せ
し通り、追^お手^てをかためのかたしの目貫^{めくわ}早速^{さつそく}よお請^こうされし
段^{だん}、立歸^{たちかへ}つて義經公へ申^{まを}聞^{きこ}べ、拙^{せう}者^{しや}が面^{めん}目^め主^{しゅ}人も満^{まん}足^{そく}、すぐ
今日^{けふ}迎^{むか}ひの乗^{のり}物^{ぶつ}、拙^{せう}者^{しや}が宅^{たく}迄^{いた}落^お付^{つけ}給^{たま}へ、後^{あと}刻^{こく}ゆる、くは意^い得^{とく}
んど、客^{きやく}の目^め禮^{らい}亭^{てい}主^{しゅ}の愁^{うれ}の暇^{いとま}乞^こひ、辭^{こと}義^ぎも禮^{らい}義^ぎもそこくは館^{くわん}
へ歸^{かへ}る泉^{いづみ}三^{さん}郎^{らう}、五^ご斗^との跡^{あと}を打^{うち}詠^やめ、此^こ德^{とく}女^{にょ}めいどこよゐる、
娘^{むすめ}くと呼^{よび}紛^{まぎ}らし泣^なみ入^いこそ道理^{道理}なれ、跡^{あと}は關^{かん}女^{にょ}の氣^きも

ろくどふかこふかと案じの最中、約束人といひかつ聲時分
かんがへ捻金門入、泥めい内へ戻つたかと、すぐ座敷への
さばり上り、どこよけつかる引張り出せど、家内をきよろき
よろぬめ廻せば、小づらよくさのよくて口、手附を返せな
らわたやかましい戻して仕廻ふ、もちつとそこを待たやれ
と、立て行を待妹、もちつと先迄おい金が、俄有て戻すとい
ふ、聞へた、たつた今爰の内から立派お侍が、編笠きて京の方
へいかれたが、何ぞよい事が有たか、常からさすくいふと
思ひ、此の門入も隠すのか、ありや皆わいらが爲じやぞよ、な
せ、といへ、五斗兵衛も酒をやめさせ、細工も精を出さそふ斗、
眞實何の憎からふ、えん泣寄といふ事えらぬかい、よい事
あら俱うと悦びたい、隠さずと咄して聞えや、どふじやく

とたらしこむ、遠女さうがのあどあさゝ兄と思へバ心をゆるし、其
心底こていなら何隠かくそふ、けふの大三が戻つてきての、様子を聞ふ
頼朝様は御奉公、次手は親の五斗殿も御味方ふ下れどのふ
使、もちつどの違がひで義経様へお味方申、大三が死ると知
あがらう、そついて追かへしたと、いひもきらせず、ナニ五斗の
都方へ早味方みかたか、まゝ、それく、其やうあめでたい事、何で兄
は隠かくすのじや、手附の金もへちまもいらぬ、逢てちよつと慨うろこ
バふ、呼でたもれど打どけ顔、ある程奥は居られますと、兄が
心なまらばりの襖ふすま引明呼ふ立、門入のそろくど尻引しりから
げ身繕つくろひ、儕一人が心よりなづき、鼻息はないきもせず窺うかがひ居る、かく
といえらば五斗兵衛門八殿かようこそと、立出るをやりす
とし聲をもかけず後うしろより、只一討と切付るを、心得たりとか

いくゝりずつと寄て刀もぎ股、ぐつとつゝこむ五斗が早業、
うんどのつけよそりかへる、音に驚き女房娘何事かんと走
出、見れば夫の手よかゝり門八が苦痛のてい、是れど斗あき
れ果えべし、詞もあかりしが、五斗刀を門八が腹よ其儘突込
あがら突飛して座を改め、思ひがけあくだまし討よと切か
けし、子細ぞあらんまつそぐよ白狀せよ、様子聞ねば殺さ
れずとねめ付れば、門八息をほつとつき、假も人のつゝ
まむべき、身よ應ぜぬ強欲ぞや、此程本田近經が書狀到來、
汝よ縁有五斗兵衛、軍術よ妙有事頼朝兼て聞し召れ深く懇
望あさるゝ故、忤大三を召捕置たり、もし味方に招かぬ内方
一五斗が都方へ一味せば、鎌倉の爲よ心腹の愁、早く首を
討てくれよ、いつかどの侍よ取立んどの文章、何んでもかの

れ仕^し負^おせんと、百^{ひゃく}疋^{ぢつ}猿^{ざる}の目貫^{めくわ}を誂^{おろ}へ、毎日^{まいにち}く入^い込^こし、事の
 様子^{ようす}をさぐらん爲^{ため}、今^{いま}妹^{いもうと}が咄^{はな}しを聞^き、扱^はこそと心の悦^{よろこ}び、只^{ただ}一^{ひと}
 討^うよと思^{おも}ひしが身の破滅^{はめつ}、誰^{たれ}あらふ日本^{にっぽん}の大將^{だいしやう}頼朝^{よりとも}公^{こう}の目
 がね、預^より、軍師^{ぐんし}の器量^{きりやう}をなはつたる五斗^{ごとう}殿^{でん}、我々^{われわれ}風情^{ふうじやう}が
 手^てよか、つて死^しるの仕合^{しあひ}、本望^{もんぼう}のとげね共^{ども}、一旦^{いつたん}約束^{やくそく}した通^{とほ}
 り、本^{もと}田^{でん}へも義理^{ぎり}の立^たた、コレ、五斗^{ごとう}殿^{でん}、妹^{いもうと}や姪^{めい}が事^{こと}、必^{かならず}お見^み捨^す
 下^{くだ}さるあ、いふ事^{こと}も是^{こゝろ}迄^{まで}、早^{はや}う此^{こゝろ}世^よの暇^{いとま}をたべと、常^{つね}よか
 りし今^{いま}の健^{けん}康^{かう}さ、妹^{いもうと}や姪^{めい}の血筋^{けつきん}の別^{わか}れ泣^なたけれ共^{ども}夫^その心^{こゝろ}、
 兼^{かみ}ては違^{ちが}ふ云^い譯^{わけ}と忍^{しの}び、涙^{なみだ}もむせかへる五斗^{ごとう}も、袂^{たもと}をしぼり
 しが、驚^{おどろ}き入^いたる心^{こゝろ}底^{てい}、善^よもせよ惡^{わる}もせよ、人^{ひと}と約^{やく}せし
 一^{ひと}言^{ごん}の、義^ぎを立^たぬくが男^{おとこ}の魂^{たましひ}、でかされたり、とても此^{こゝろ}深^{ふか}
 手^てで、存^{ぞん}命^{めい}思^{おも}ひもよらぬ事^{こと}、某^{たれ}を討^うんとせし、武士^{ぶし}も成^なた

き初一念、未來るんまの廳^{ちやうど}ゐて、義經公の御内五斗兵衛と
ひつくんで、討死せしと傳へられよ、我も又鎌倉より、さほど
懇望^{こんぼう}おされたる、御厚恩^{ごこうおん}を報ずる寸志^{すんし}、運つきて敗北^{ばいはい}せば味
方の勇士^{ゆうし}ぬきんで、一番^{いっぺん}討死せん、是を土産^{みやげ}に成佛^{じやうぶつ}あ
れ、苦痛^{くつう}させじと引よせて、どゞめをさせばはかなくもさめ
ゆく夢と成ゆけり、親子の死骸^{しかい}いだし付、袖と袖とよ聲渡
前後ふかく取乱す、五斗の心を取あをし、まことや東福^{とうふく}
寺の聖一國師^{しやういちこくし}、我子の肉を喰大道^{だうだう}心を立られしためしも
有、出家も武士も義の一つ、よしあき愚痴^{ぐち}まよふたり、都の
迎^{むか}ひも程あるまじくやむあ、泣き此死骸^{しかい}いざ、野邊^{のべ}のい
どなみと親子をいさめ引立て、死のゑん無量有^{むりやうあり}てんべん、
定めなきこそ世の中どのさめあがらもと涙、關女や徳女

が忍びねゑ、かく聲すぐに經陀羅尼、手向とあつて未來の家
土産、じやつくゝう淨土のはちす葉の、花のうてなゝいたり
いたらんかのさしのひがん櫻やいりあいの鐘をかざりゑ、
あれし大津の里はあれはあのみやこへいそぎゆく

第三

錦戸兄弟目ゝ角立、ヤア待く何やつあれば頬を隠し踊の邪
魔する曲者め、引ずり退んと伊達次郎、取付腕首しつかと捕
へ、アリヤサコリヤサマかかせておけろともんどり打せばそかさす後へ
錦戸太郎、後矢筈をしつかとどる、こいつもちつくり上手め
と、前へ投こし踏飛ばせば、是にと取付二人の踊人、ゆん手めて
へ投付られ、ソリヤあはれ者怪家そなど、叫ぶる聲は静鵜鷹を始
とし女中の残らぬ跡入バ踊のやぶれ散乱たり、兄弟ほうほ

う起上り、といつあれば我君の御前をも憚からず、はたへ過
たる狼籍者類、見ておかんと立寄て、類かぶり引たくれば龜
井六郎重清が、よがり切たる顔付みて、そつくと立たる有様
も兄弟兼て、手並ひしる、小氣味わるさよじりく、と尻込し
てぞ見へよけれ、御心よさわれ共、詞をやばらげ義經公、心
へぬ六郎が行跡、招かぬ踊も物好姿、我慰みを妨る、所存いか
よと仰を待す、情なや、踊のやぶれしよ御立腹まし、
天下の乱るしよ御心も付かざるか、さいつ頃鎌倉が仰こ
されし人質、お渡しなき故頼朝公の怒りつよく、近々大軍責
來るとの風聞、万民の心安からず、然るも晝夜のわかちあく、
色ど酒どよ正氣を奪われまします故、お家よ古き武藏を始
十一人の御近習、入かり立かり御諫申せ共、お侍も仕へ

る倭人めらがあまき詞に迷はされ、御聞入なきのみならず
かへつて御ふ興蒙り皆分國に引こもる、今までもすの御大
事といふ時、君の爲に一命を露ちりいどの忠臣の御館
まひらず、此御合点も行ざるの天魔の見入か淺ましやと涙を
流し諫むれば、こまやく成六郎、汝燕雀の分として大鳥の
心いかであらん、一旦互に和睦をあし心とけたる兄頼朝、何
しよ約を變じ給ひ一戦に及んやと、仰ふ六郎取あへず愚
成君の仰、梶原平三が様々の讒言、殊更兼房が請合し人質靜
御前、君は得心ましまさねば御舍兄も又契約を、何とて守り
給ふべき、只今も人質を鎌倉へ下し、憤りをまづめ給は
ば、天下の自然とわだやかならん、最前を我君よさからふと
の知ながら、こす上るも國家の爲、早く倭人を遠ざけ忠臣を

招き寄、か家長久の基を極給ねれどくり返し、諫言した
る若者の十九歳にて討死せし、義經公の内は四天王と名
を得たる其一人の勇士、氣早の大將は氣色かなり諫を
入るゝ家來の役と宥死すれば付上り、佞人又迷ふと存外
千萬、必定錦戸兄弟が威勢を妬む讒言か、佞人との儕が事罷
立重て目通叶ぬと、以ての外の不機嫌にて、御座を立んと
ま給ふをば裾やすがり付、情なきは仰、目通りへ叶ね
ば切腹するより外になし、譬御手よかしれば迎、すかけたる
我諫言、露斗開入給は、何か命の惜からんと、押て諫る忠義
の一圖、返答もなく立蹴りけやり、兄弟、奥にて酒宴催さ
ん、いざ來れよと言捨て一間の内へ入給ふ、龜井の余り又興
さめて暫したらずみ詠めぬる、錦戸伊達にわざ笑ひ、辨へ

かく出る儘のほうげか、佞人の惡人のど人をそねむ報ひも
て、君の不興けうを蒙かちりながらのめく生てゐ居られまい、恥を
えらば切腹せよ、兄弟是みて見物せんと、さもよくていある
一言も、こたへ兼てくいつとねめ付つ、儕等が性根しやうねよくらべ、
おせいをうらやむ讒言ざんげんとい、奇怪きくわいあるあひだ骨引ほねひさいてく
れんすと、飛かゝらんとする所へ、待給まちへ龜井殿と、聲をか
けてお次々立出る泉の三郎、血氣けつきの六郎大老の、詞めめんじ
猶豫うゑうのてい、三郎近くすゝみ寄よ、六郎、異見いけんが一圖づお故返
つては前も聞入きこない、君踊を好給へ、錦戸伊達の兄弟よ
い年してさへ雀踊すずめ、其元もあせ踊られぬ、たしかみ召れと
兄弟が、耳みみも釘くわさす詞も龜井の猶せき立た、自分迄踊とい、
踊が國家の爲ためも、成共く、もゆる火をけさんどて水を

かくれの猶さか立、さかんある火を納るゝ、又火をもつて
けす道理、爰をよく得心あれ、去よつて某も、は前まで一踊
致さんと存れ共、君の音頭、古風、故、彼道念ふしのへんづ
くしがよからふと思ひ付、日本一の音頭取五斗兵衛を同道
致した、此音頭で踊る時、いか程大きな踊でも、たいこを
乱さず一致して進退かけ引心の儘、追付是へ来るべし、君も
此事上はやし方の手配せん、其元の歸宅有踊の用意あら
まほし、は前の拙者も任されよ、智勇をかねし三郎が、教も
龜井も胸落付、驚き入たる踊のさいばい、音頭取の物好迄
承りつて安堵せり、萬事貴公にお任せや、何さ、は前の踊
の某に、は邊のれ宅へ、れさらば、さらばと義者勇者、飾戸伊達
も目もかけず泉の一間へ六郎の心を、残し立歸る、跡も兄弟

ゐんこう鳥踊半あかばへ日の出し心地こころ、兄者人、權頭を初忠義達
するやつ原大方はら又押込、残つた泉いづみと龜井、けむたくてあら
なんだう先一人の半片付、次手つぎ又泉三郎めも押籠おさこる思案しあんの
ないか、有共ありとも、きやつが今いふ五斗兵衛根が目貫の細工
人、生れ付ての底ぬけ上戸酒をくらへバ乱れ出し、二斗三斗
の限かぎりなき底ぬけ故、誰いふとなく五斗兵衛、本性を失うしなひ何
の役やく又立ぬやつ、それを見込で一ツの方便てだて五斗めがうせた
る時め見へせぬ内酒くらひせ、馬鹿ばかつくずを越度もちどみして、き
やつもちの勿論三郎めもさんげさらんらう云ちらし、追まおくつて
仕廻ふたらうつりの大將だいしょうめ、立ふとふせうと我われの次第、必
ぬかるお弟おにと、人を損そとふ悪工あくこう、上うのうの分別、氣遣ひ有る拙
者しや又諸事を、お任せと打連興へ入いりける、暫く有て五斗兵衛

再び花咲會稽の錦ゝあらぬ出立ばへ、木綿どてらゝ麻上下
藤卷柄の大小を、遠名高き軍師とい聞しゝも似ぬ衣紋付、細
謹を返り見ぬ大丈夫、笑ふも譏るも何共なく座の間近く
入來る、伊達次郎出向ひナニ其元が聞及ぶ五斗殿、先達て承
れバ改めあらたは名に聞ゝ及ばず、手前てまへの伊達次郎とや者、万事貴
公のは引廻しゝ預りたし、是に結搆けつこうおは挨拶でござり
ます、新參の某諸事此方からお頼なにかばく、お手上られい、先貴
殿どのらいざく、と禮義半へこしらへぬが、銚子てうし盃持出で、是には前のお
盃てうだいに頂戴遊あそばせと、いふゝ次郎が打點頭うちてんとうこれ五斗殿、へん邊
が酒を好このまるゝと聞召義經公々お盃、ナント一つ參らぬかと、指
付れバやけ石の、飛付程とと思ひしがちやくと思案しあんし、いやで
いこりてい、まだおめ見へも濟すまぬ内、先さきゝよしゝ仕らふ、ハテそ

れに氣の毒、たつてどのやされぬがすいた物を呑ぬといふ
に、其元は似合ぬぐちの至り、こゑかも此酒は前の名酒、
ナント浦山まうの、ござらぬかど、ぐつどのめは咽ぎつくり、又盃
まてうどうけ、穴へ釣込おしみ呑、傍は五斗の咽ひぬく、唾
を呑込だる心根の、日照續は百性の雨乞するもかくやらん、
こたへ兼て盃おつ取くちつどすけふどがぶくく、まて
りやたまらぬく、押へじや有ふど又こくく、まてやつた
りどあがゑをすぐは瀧の酒、たへずどうくもりつぶし、方
便は乗た次郎がいさみ、やがて銚子をかへし、大將九郎義
經公五斗兵衛は對面せんど、ひたしれは折烏帽子泉三郎先
は立は廣書院は出給へば、跡は續て錦戸兄弟異義を續ひ座
は直る五斗兵衛の玄ろりと見て、廻りかゝりし舌あんばい、

是（調）の皆様ようこそ出（コト）、噂（カ）よ、たばこ盃お茶をもてこいと
我家と心得馳走（チ）ぶり、泉（ミナ）のはつと仰（オ）、天（テン）と、扱（ハ）の錦戸兄弟が酒
をもりしゝ極つたりと、悟（サト）あがらも此場（バ）の難義（ナンギ）目顔でゑら
せとゑろりくゝん、義経遙（ハルカ）と見下し給ひ、三郎（三郎）がすゝめし軍
師五斗とい彼が事な、いゝしへ漢（カン）の韓信（カンシン）を、高祖（カウソ）初て見し時
得たる諸藝（ゲイ）を尋給ふ、其例（レ）あれバ尋て見ん、（レ）兄弟聞て見
よと、仰ゝ出ゑやバる錦戸太郎（三郎）、（レ）五斗殿六韜（リョウ）三略（リョク）をそら
んせしか、明白（ミョウハク）のべ聞されよ、何（ナニ）や、六韜三略、我等（ワガ）ずんど
存せぬでゑすい、何（ナニ）やゑらぬ、（カ）見事な軍師の、（コ）然らバ武（ブ）
藝（ゲイ）の、武藝（ブゲイ）か、（コト）又武士の表道具、先と、弓（ユミ）鎗（ユツ）鉄（テツ）鉾（ホウ）馬乗事、劍術（ケンジュツ）躰（タテ）
術（ジュツ）ひつくるめすつきりとゑらぬでゑすい、（ナニ）きつい物か、先
一たい根（ネ）が嫌（キミ）ひでゑす右の通りの仕合故、何をさせても埒（マチ）

明ぬ、どかく好^{すき}あひ、くれこさじやど、又引かゝへ呑酒を、手
は汗^{あせ}もざる泉三郎、胸をいたむる斗なり、大將^{はなはだりつ}甚立腹^{よく}まし〜
かゝる浮世のすたれ者、我^わもすゝめし泉が心底^{てい}いふかしと、
仰^{おほ}ふ三郎^{さん}、は尤^なのは不審^{しん}、昔^{むかし}より云傳^{つた}へる智者の一失^{いちしつ}とい
此事、酔^よさめて後軍術^{こんじゆつ}の奥義を尋見給へど、いひも切せず氣
早の大將^{だいしやう}、こゝ心得ぬ一言、スゝ一大事の場所も成て五斗が酒
も乱れしとて、正氣も成迄待べしと敵が軍を猶豫^{うご}すべきや、
言語^{ごんご}またへたる鹿^そ忽^{とつ}の云分、此義經をあざけるのか、軍師と
い思ひも寄ず、アレ引出せと怒^{いか}りの面色重て何のは誑^{うやう}もなく、
座を立奥へ入給ふいよが〜、まぐろ見へよける、錦戸兄弟
ゑつぽも入^い、わのやうあどくだうを軍師じやの何のど、目利^{めき}あ
されたお方が見事、よう合点の行やうも、誰か有^ああの酔^よどれ、

たゞき出してお目よかけよと云捨一間へ入ければ、跡に泉
三郎の五斗が乱れし躰を見て、是非もあや残念や、併いか
程下部が働共、きやつらが手よあふ五斗よあらず、万事の思
案の館でこそ、よつくさやつに兄弟あれど、愚人を相手よ隙
ついやし、無益の論と誤りを身よ引受て立歸る。下知を受た
る下部共、てんでよより棒わり竹持、何よもしらず軍者呼
り、御知行をしてやるといのふとい奴、たゞきゆがめて追ま
れど立かゝれば、待たゞ、軍師の商賣致すよよつていづ
れもが御腹立、是からさありとやめよすると、刀投出し立上
り、手彫の目貫が御用なら直段付て申て聞ふ、先第一の細工
物、牡丹よ遊ぶ獸の、大方四々の十六貫、月よ兎の子持の證據、
三五をかけて十五貫、猫の二四が八百匁、狸の金で百疋、つ

あぎ馬の相場もなくめつたむしやうまたいこ付、猿の三十
三貫三百三十三文、紋盡あら桐のとう五七兩から五三兩、
毛彫の鼻が重寶で、お望なれば三百目、其外家の三番叟、お望
次第好次第ふたるゝかりりゝ進上と口ゝ任せて云廻す、欲
ふける下部共、うれゝ近頃忝い、とてももの事ゝ直の高い三
番叟が貰たいそこゝ持てござるあらお見せあされて下さ
れど、搦づらはるついでしやう口、何じや三番叟がほしい、それ
の何よりもつて安ふい、お望の三番叟、さあらバ目貫を参
らそふど傍ゝ有合踊の編笠ひつかづきたる俄のゑぼし、ま
かつべらしく聲はり上、おうさいを、悦びありやく、我此
所より、外へんやらじと思ふ、ゑいゝゑいゝゑいゝゑいゝよゝいされ
て、似せる家來が鵲の眞似や鳥飛して、歸りける、詠繼し武門

の榮へきらめきて、庭の水草の落葉かく座敷廻りのほき掃
際箒、かた手はやり哥、實も泉三郎が館と知ていさましき、
女仲間が打寄て、此中から此おやしきへ、どこやらの牢人迎、
女夫は娘三人連お客く、と大事なかけ、どふでも譯の有そ
な事、みんな何も聞きやらぬと尋れば何のいの、どこも
われが牢人衆、元の目貫の彫物師、兵法や軍法が上手な故、大
將又成どいの、まかもけふのふめ見へ迎旦那樣とは同道、そ
れ程軍が功者あら、人の見ぬ間の夜軍も大抵の事で、有ま
い、なんとそふの思やらぬか、く目貫師あら高がまれた、お
内義の穴彫の、馬事するの上手である、本の馬は打乗て切
合の覺束あいと、遠慮會釋もかけ言のあだ口くふやかまし
し、折から奥の泉が妻、高の谷あやみ出、口さがあやぬ共、尤是

迄職人^{しよく}よて、大津の里よお住居あれ共、根が木曾殿のに牢人
といひ武藝といひ適^{あつたれ}の武士と連合の悦び、様子もえらいで
見苦しい、おかもじや娘^{むすめ}の耳へ入たら、自迄^{みづから}俱うと譏^そるか
ど、さげしまるゝが恥かしい、重て^{かさね}急度^{きうど}たしなめ鹿相^{そさう}をい
ハ赦^{ゆる}さぬど、呵付^{しかり}られ尻^{しり}込^こひ、誤^{あやま}り入て見へよける、關女^{かんめ}の娘
を、伴^{ともな}ひて何心^{なにこころ}あく奥より出、氣の毒^{いづ}顔^{かほ}よ是^{こゝ}にえたり、どふい
ふ事で奥様の、御機嫌^{きげん}がそこねしど、少ゝの誤^{あやま}りなら、慮^{りよくわい}外^{がい}な
がら私^{わたし}もめんじてのほ了簡^{りやうけん}は堪^{かん}忍^{にん}遊^{ゆう}させと我身^{わがみ}の上の噂^{うわさ}
とい、あらで取あす追蹤^{ついしやう}まじり、そバで聞さへ笑止^{せうし}なり、高の
谷も打ゑみて、^調皆^{みな}の者^{もの}、けふのあなたのは挨拶^{あいさつ}了簡^{りやうけん}をるぞ
勝手^{勝手}へ立ど、呵付^{しかり}られあいゝと、皆打連て走入、娘の母の袖
を引ず、^調かし様、どし様の^{よう}前へお出、まだお歸りもあさそふ

あと、尋れば、待兼ねるに尤、イヤや奥様、かやうなやせば夫の事、
ややうで思けれど、七八年も連添そよて、万事心を付ますれど、大
酒呑でたのひのないと、目貫を上手な彫はるより外、藝の何よも
あい人、軍師とやらななる、逆、三郎様がいかにお世話、仕
付け事を致されたら、明ても暮ても仕損しそこなひ、つねにわいのそが
つきやうかどわたしが案あんじ過し、は推量すいりやう下さりませ、殊なけ
ふにお目見へよ早はやくから同道、きつうお隙が入ますると、
氣遣きづへば高の谷會釋えしやくして、是に扱卑ひげ下をしてのは挨拶、お氣
遣ひ遊ばすお、夫泉三郎も、堀川の館やかたで隠れもない武士、
つるよ是迄鹿相そきをいはず、えめくしりがよい故、ありや眞替まがひ
の平打紐ひらちひ、あの人の云事ありや慥たしかなど、人の噂うわさも乗程お堅かたい
侍、見込があうて世話せはやく物か、首尾しうびようお歸り遊ばさふとい

ふ間程なく表より、殿様のお歸りと下部が呼べる聲も連、いつまかりて泉三郎、疊さへりもあらけなく、不興顔にて立歸れば、只ならぬ躰氣遣ひさ、お下りか我夫ど、いへ共何の返答なく一間へ通れば、妻の高の谷五斗が妻子も手をつまへ、けふのいかるに苦勞さま、お前のお首尾いかいぞやと、尋ふ泉の溜息つき、誠や智者の一失とて、古語に違ひぬ一ツの疵、古今ふ双の侍あれ共、酒といふ大病の偏鵲が薬も叶ひぬ、情あや五斗殿、錦戸伊達が斗略のせられ、いつの間も吞れしぞ、又例の大酒、どろつべきも成てのほめ見へ、何を尋ふされても存せぬ、まらぬと取あへねば、お前の首尾いさん、雑人原また、き出され、見ぐるしき行跡、今日迄人々笑われぬ某迄、面目を失ひしと語れば、高の谷興さま

し、五斗が妻子も空^{そら}に成^{なり}、まゝ夫^{おつ}のそれなもいつ方へ参ら
れしど、おろ／＼涙^{なみだ}も尋^{たづ}ねられ、外^{そと}へへ行^いれまい、追付^{おっつけ}是へ歸
られ、殘^{のこ}念^{ねん}千万^{まん}と、立上^{たちあ}られ妻^{つま}の高^{たか}の谷^や、よしあい人の取
次^{とりぎ}遊^{あそ}べし、おまへ迄^{いた}御^ご耻^ち辱^{じよく}、氣^きの痛^{いた}いお構^{かま}ひ無^な用^{よう}、ちどお休^{やす}と
伴^{ともな}ふて、一間^{いっけん}の内^{うち}へ入^い海^{かい}の沙^{しば}の干^ひ潟^{がた}も捨^すられ親^{おや}子^この跡^{あと}を
打^うながめ泣^なより、外^{そと}の事^{こと}ぞあき、酒^{さけ}といふ世^よのくせ物^{もの}も、うか
されて軍^{いくさ}師^しも今^{いま}の塵^{ちり}ほこり、箒^{はうき}の先^{さき}も二^{ふた}升^{しやう}樽^{どん}く／＼り付^つ、
目^め貫^{くわ}師^しなんでもせい、箒^{はうき}／＼と賣^うた^る親^{おや}仁^に、見^み世^よの端^はも暫^{しば}
しに休^{やす}土^{つち}の人^{ひと}形^{かたち}や着^きを寄^よて、二^{ふた}つ三^{さん}つ四^よつ五^ごつも六^むつもた
べつ、押^おへつ、あひしよとおまよとおまやる、脇^{わき}より人^{ひと}の見る
あらばかるまた／＼、かるまた、おかしかるまたけりかる。
面^{おもて}白^{しろ}い、御^ご前^{ぜん}で下^{くだ}されて、それから長^{なが}者^{しや}町^{まち}の池^{いけ}が手^て造^{ぞう}

を、天王寺が所で、こすで給^たたじやて、是の見事じやといふて
平又五が、材木程^{ざいもく}お牛房^{うぼう}をはさんだ、こりやとふじやと
いふたら、辰巳角^{たつみかく}の金もめが、角香^{かくかう}ふせいといひおる、赦^{ゆる}せと
いふたらあらんて、いづや山さぶが、銅^{あがね}のつるかけを出
した、所を小氣味^{せうき}ようきこしめしたじやて、何と無理^{むり}の、無理
であか、さらば座敷へ参ふと一間へ通り、この作り^{つく}、たう居る
か、お客^{きやく}罷^き戻^{もど}つたぞ、ゑいやつとこおの相伴^{しやうばん}せうと、又引か
らへ香有^{かう}様、女房見兼^に走^{はし}寄^よ、五斗殿^{ごとう}、時^{とき}も時折^{ときとき}も折^を、一世一
度の出世^{しゅっしよ}の場所^{ばしよ}、くらいどれの酔^{よめ}どれのと、退立^{たいだつ}られて無念
ふないか、愧^くしうの思^{おも}ひせやと、せりかしれば、女房^{によう}無念^{むねん}あ、
じやふよつて糺^{ただ}たじやて、其^{その}給^たた故^{ゆゑ}引出^{ひきだ}され、赤恥^{あかはぢ}かい
たであいかいあふ、誰^{たれ}が、こなたが、やくたいもあひ、

前で錦戸兄弟がいかぬもてあしきつう酔た程よいんで休
めてし、引ずり出されたナントエイカ娘よ、あすからわれを馬よの
せま^{ナント}鼻^{エイト}を乗物よのせてナント^{エイト}、我等が昇^{かく}じやて、悦ひ事よ又い
たそと、樽^{たる}傾^{かたむ}れバ女房興^{けう}さめもぎ取て、涙をうかめ、^調浅まし
い口^{くち}のそれ程かいいひか、恥を恥共思^しぬ酔せれ、さほせよ
あろ共思^しぬす娘を連て嫁入し、五年餘りの辛抱^{しんぼう}、又まても
又まても吞過^ししての仕損^{しそん}ひ、ほつどあいそも盡果^{けん}た、こなたが
何の以前が武士、竹のふしか木のふしか、^{かつは}鏖^あぶしでも有ま
いど、恥^ち類^{るい}かしせせきよろりが味^み増^{そく}、こりや出かした武士
盡^{つし}の口合^{くあ}どふもいへぬ、^{おしろ}面白^{おもしろ}いん、^調迎^{むか}もの事よ小哥哥
しで、一ぱいしかかけよ、君よ命をかけ帯の、^調伽羅^{きやら}め、あいまお
らぬか、おさへかど、まなだれかゝるを、取て突退^{つきのけ}、こなたの

の迎も其根性こんじやうで、女房子の面倒めんどうを見届とどける事ことの成なまい、よいかげん又隙ひまおこしや、去狀きじやうかしそと床とこの間の硯取手すゐりもこらえめ、わざと手づよき詞の角、娘むすめの悲かなしくすとし様、今からふつゝり思おもひ切、酒呑まいといふてたべ、おが拜かます頼たのますと取付つけ、すがり泣居なたり、母ははの娘むすめを引退ひきどてゆり起おこし硯突付すゐり、い暇どの狀じやうをかいて貰もらふ、こく、どふじやぞいの、こ五斗ごとう腹はら、返事へんじさつしやれぬ、但ただ酒さけを止氣とどめ、とど止とどる、さ何なにじや酒さけをふつとり止とどめる氣きか、い今夜こんやの爰こゝ泊とどる、一筆いっぴつかけあらかこふかどゆがみずじり又三行半さんぎょうはん、こかこよ、是こゝでよいか、またが、五斗ごとうが隙ひまやる、只ただやつて、一分いっぴんが立ぬ、半分はんぶんも立ぬ、こ此こ相口さうぐちの親重代おんぢやうだい、三匁さんもん五分ごぶんで買かたれど、隙ひまやる印いんじや持もていけど、投出ていしゅしたのも夢現むつげん、前後ぜんごもえらすふしよけり、娘むすめのぐんせも涙なみだよ

くれおろく、そるを、^こ徳女、是の母がこらしめ、異見の爲に
取暇、目が覺たら常の通り、やつぱりかいらぬ女夫の中、泣事
ないと娘をすかし、伴ひ出るを高の谷が、お内義待たと走出、
此醉どれを残し置、そなた衆斗歸るとい、そふうまふの成ま
すまい、お連合も引起し連ていんで賞ひまゑよと、呼留られ
て五斗が女房、むつとせき上どつかと座し、奥様、泉三郎
様のおかもち、こちらの男が酒香のたのいあしといふ事、最
初からえれてある、それを愛の作亭主が見込が有の、取次の
どめつたむえやうより上、住馴た大津の里、身代をたしま
せ、今でいどこも居所おい、うれゑ何じや、こちらの夫のえめく
くりがよい故、泉三郎といひぬ、眞替の平打紐と自慢たら
だら、是がどこゑめくより、ひよんお人ゑ見込れて、あげ

くの果ゝ縁切て、さられたら他人たまんむき、かまゝふ理屈りくつのない
筈はず、酔よどれいゝあたまたから吞込くみこでのお世話せわ、やつかい次手じてゝど
ふ成なりどは勝手次第かてしだいゝなされませゝあた面倒めんたうなど出ほうだい
云たい事をいひ破やぶり、こい娘むすめと引立て次の一間へひつゑ
よあゝ氣づよく出るゝ出たれ共、心元こゝろもとあゝ氣遣きぢひゝ暫しばし、小
かげゝイめり、跡あとゝうつとり高たかの谷やゝ、五斗ごとうが妻つまゝいひ込こら
れゝゝゝやくゝゝや腹はらの立居たちゑもあらく、此上こゝよりゝこつちも意踏いぢ酔よ
どれめを引ひ起おこして歸かへさんど、肩かたをゆすりつ手足てあしを持引もひひと正
躰ていなかりしが、酒さけの匂におひゝ鼻はな向むかのあらぬ上猶高うへよりいびき、石佛いしほとけ
共死人ひと共たどへがたなき有様ありさまゝ、ほつど其身そのみも精せいつかし、扱あ
もく、何様女房なんやぶらうの思おもひ切、是こゝなら道理りやうりと了簡付りやうかん、よい此上こゝより
家來けらいゝいひ付、たゝき出すより外ほかあしと、勝手かてゝ向むかひ壁高かきく、

誰か有る、此醉どれ引ずり出せと呼べる聲、待女房用事
有と、鉄砲提泉三郎、一間の内へ立出て、彼が乱酒をしりあが
ら、懇望して頼みしへの深く見込し所有、我眼力が違ひしや、
實否を糾さんろこのけと火蓋を切てねらひもなく、どうと
放すから鉄砲、ひきき五斗のむつくと、起、ぎやうと、し
や、今打し鉄砲の陰に離れ陽はづれ、筒は音有て向ふは音
あし、扱ひ玉あきから鉄砲、何者のまのざぞと四方を急度
ねめ廻し、勢ひかゝつて立たるは、實諉は云傳ふ、心がけ有侍
の響の音は目を覺す、たとへを引もあらかあり、泉三郎つと
と寄りいかは五斗、今ひききたる鉄砲の、五音の調子はいか
よ、乾坤二つの間をぬけ、離の卦は當つて中切たり、御
兄弟の御中議者の爲またち切て、鎌倉の怒りつよく敵半途

送寄たるぞ、油段有^{ある}三郎殿、左程の御邊^{へん}が何故^{なん}も、錦戸伊
 達^いが計略^{けいりやく}の大酒^{だいしゅ}も正氣^{せいぎ}の乱^{らん}されしぞ、夫^そこそ病^{やま}とまつて
 もる酒^{しゅ}を、吞^のずば却^{かへ}て世^よをへつらひ、餘^{あま}をむさぼる族^{うぢ}とい
 れん、元來^{もとより}名利^{めいり}の望^{のぞ}ぬ某^{たれ}、一旦^{いつたん}の契約^{けいやく}あれば、君^{きみ}の心^{こころ}の薄^{うす}く共^{とも}、
 貴殿^{きでん}の忠義^{ちゅうぎ}厚^{あつ}きよめんじいかで違背^{いはい}有^あべきぞ、ハア、頼^{たの}もし
 く、然^{しか}らば以前^{いぜん}頼^{たの}みしごとく、一方^{いっぽう}ふせぎ給^{たま}ひるべきや、チヤ
 いふもや及^{およ}ぶいそいで御用^{ごよう}意^い、尤^{なほ}と心^{こころ}とけ合^あ猛將^{もうしやう}勇將^{ゆうしやう}一
 間の内^{うち}へかけ入^いたり、高^{たか}の谷^やの二度^{にど}恟^{せう}り、目利^{めき}えた夫^そも夫揃^{そろ}ひ
 も揃^{そろ}ひし弓取^{きうと}やと悦^{よろこ}ぶ、襖^{ふすま}のこなたな五斗^{ごとう}が、妻^{つま}も興^{きよう}さめ
 顔^{かほ}、かほど功有^{こうあり}武士^{ぶし}とあらで暮^くせし悔^くしやと、先非^{せんひ}を悔^くむ去^さ
 狀^{さう}も、今^{いま}さら何^{なん}といひよらん、詞^{こと}かければおづ／＼と娘^{むすめ}が手^て
 を引差^{ひきさ}足^あも、あゆむ疊^{たたみ}の、目^めも涙^{なみだ}、俄^{はな}く作^{つく}るけいはく笑^{わら}ひ、ハハ、

まあ、わたしとまた事が、七八年も連添て、あのやうい
さましい男とい、夢いさゝかも存ませず、ひよつとまた腹立
紛れ、おまへと遠いひ過し行所もない身の上、常、何程結構
でも、くのさるのといふた跡、すぐと説も致しとくい、慮外
ながら詞を添られ中なをして下さりませと、手をつかゆれ
バ突のけて、女中、女房の方から隙取て、懸口いふたをあた
が又あの五斗殿が、今ど誠の武勇を顯し、大手の大將承り、
出世の身と成た逆、一旦隙を取た身が又添たい説言をえて
くれい、尤むや、お道理でござんすいの、またが最前お
まへのおつゑやる通り、こちらの夫泉三郎目の明ぬ男、其又女
房と此説をえてくれいかへ、そふおつゑやると私に、爰で
穴へもはいりたい、眞實縁を切心で、かゝせて取た去狀あら

ず、こらしめゝ異^る見^{けん}の爲、お詫を頼む奥様、ミヤ手を合せて拜^{おが}みますと涙をこぼし頼むゝぞ、傍^{そば}ゝ娘^{むすめ}の聞きづらくこたへ兼しが最前ゝ五斗兵衛が渡したる暇^{いとま}の印の相口を、抜より早く我^{われ}咽^{のど}へ、南無阿彌陀佛とつき立^たる、ち悲しやと母親があつてふためき取付^とけ、高の谷も仰^{あが}天^{てん}し、三何ゆへの自害^{じがい}ぞとそゝろ驚く其隙ゝこなたを開き泉三郎^{いづみざらう}絞^{しぼ}縊^{けつ}の鎧^{よろひ}直垂^{ひたれ}あきたの一間の五斗兵衛、紫裾濃^{むらさきすずね}のわりこざね、小手^{こて}脚當^{あて}も花やかゝ金のざい、銀のざい打ふりく、立出^{たちで}て床几^{せうぎ}ゝかゝりし二人^{ふにん}が行粧^{みやうさう}、目さましくも又いさぎよし、手負^{おひ}の苦^{くる}じき息^{いき}の下父^{げふ}を見上見下して嬉しき中ゝ涙ぐみ、^{（正）}淺ましいの母様、いかゝ是迄世渡りの貧^{むす}しき煙^{けより}ゝ苦しむ連、なせ夫程ゝ心迄さもしういからまやんした、たつた今迄父上を、くらひどれ

の酔どれのおまへにようもいのまやんした、東もござる
兄様のお耳へ入たら嘸腹立、其上無体も去狀かゝせ、望んで
暇を取り身が、御出世の姿を見て、又添たいと詫言を、聞入な
き奥様御頼み、見苦しい追蹤、今でん本のかゝ様より、他人の
とゝ様がいとしい、詫する手間ですつぱりとあせ死で下さ
れぬ、わまやあんまりの恥かしさもおまへのかかりゝ死ま
する、先だつふ孝の赦してたべ、やどゝ様、母様どの縁きりよ
共、私ゝ矢張お前の子、娘といふて下さんせ、思ひ出してゝ折
折の御ゑかう頼上まする、是づかりが此世の願ひ、もの物いの
して下さるお、苦しみのと斗てもだへ、歎くぞ哀あり、
聞ゝ關女ゝ氣も狂乱、しわしも五斗兵衛が妻、恥をまらいで
何とまやう、最前自害と思ひしが、跡でそあたの流浪が悲し

さ、顔押ぬぐふて叶ぬ説、いつそ其時死だらバ今此憂目に見
まい物、思ひすごしが結句あだど、悔涙又正体あく前後もわ
かず泣えづむ、五斗も目又特涙をばらひ、親の未練を面目あ
いと、思ひ詰て健氣の最期、不孝でいあい大孝行、やつぱり子
にして下されとい、ち、よういふた、嬉しいろよ、未來永く大事
の我子心の迷ひ打はれて成佛せよと跡いひさし、涙を見せ
じえらせじとこたゆる胸を三郎夫婦、推量しての貰ひ泣袂
をえぼる斗あり今の徳女目を開き其お詞聞上の最早
浮世又望めない、と、様さらバ、かゝ様さらバ、東よござる兄
様よもは息災でと傳へてたべ、三郎様は夫婦、もふお暇やま
す、おあごり惜やと斗よて、刀をぬけバ玉の緒のされてあへ
なく成よけりわつと斗よ母親の死骸よひつしと抱付聲を、

限りも泣つくす、涙をはらひ押直り、とても娘がさげしみの
百千万の言譯も、此世でのかい有まじ、我も俱もと刀物退取、
既も自害と見へければ、泉三郎聲をかけ、内室娘と俱も
自害との、恥のみえつて義理ようとし、誠貞女の道あらば、東
へとられし兄大三、奪ひ取て夫へ手渡し、真心の顯いさば、是
も増たる事有まじいかよ、と制すれば高の谷も力を付、
其時の我も夫婦二度結ぶ妹脊の仲人早とく、とすゝめ
られ、はつと歎きの死を留り、いかやう共は夫婦の差圖の
背くまじ、只此上の何事もよきよと歎きを押包涙はらふて
出行を、待女と五斗の呼とめ、生死不定の輪大三、切腹する
か但又、頼朝の手よかゝりむなしくあらば何とする、胸を
定めて赴けとばげます詞も走寄、泉が最前打捨し鉄炮小脇も

かいばさみ、御尋ごふ及ぶべきいづれの道みちも我子の大三、相
果しと聞あらば其時ころ、頼朝よりのちかの、我子の敵妹脊いせの仇あだ、たとへ
年月ふるとても鎌倉かまくらは徘徊はいかいし、鎌倉武士の色好そのみづ、筒つつと出かけ
て口藥くちやく、烟のこの火蓋ふたの鑑かがねもはづれる様あらまみを見込みこぼんど
いひする二ツ玉たまやいか仕損そんじゆべき、氣遣きぢ有な我夫といさ
むる跡あとふこあたもいさみ、でかした行ゆきとの一言ひとことがすぐ又門
出の餞別せんべつや、心こころいやたけふはやれ共、娘の別れわかれようしろがみ、
引ひ返さじ、弓ゆみはりの盡つきぬ歎なげきを押包つみ出でんとしていふり返
り、見るも見そるもあき玉よたまひ、無常むじやうの風のはげしくも、吹
ちらしたる會者あひしや定離ぢやうり、愛別離あいべつり苦くるを今爰いまは殘のこして出る都路みやこぢや東あづま
の、空へといろぎ行

腰越狀終

傳兵衛 近頃河原達引

○上之卷 祇園の段

七重八重けふ九重ふ、匂ひぬる花の都の川東祇園の社年ふりて和光の
かげもいちじるく、参り下向の人群集咄し万歳居合ぬき、えいどろく
諸見物げは繁昌の靈地なり、ものゝ身の身いといゝなをかたからめ、瀧
口左内と聞へしに龜山の勘定役人ひと心をおくじまのおりめたゝ
しき長羽織それより似ざる相役の横淵官左衛門まがふかたき悪者
づくりをばしは爰より立やすらひ、何と官左衛門殿、我が國もとあど
は違ふて繁華の地とす、物はまあ賑やか事なりとさるぬか、されば
く此度貴殿我等役用にてまかり出、えばらくの都住居、いつきてもあ
かぬよさしい、是を思へばいなかよりすく暮すといふはすさばめん
くの不仕合せ何と左内殿さのおぼさぬか、其お詞御尤もはござれ

共たどへよもす通り花のみよしの人、武士たとい田舎^{いなか}もゐるとても
心よひけの有べきや、いざ神前へと兩人、打つれ「てこそ行すぐる、一き
目立、ふうぞく、祇園^{ぎげん}の町、名も高き、おまゆんといへる戀しりが二
世のちかひを神かけて、願いはおもく足かるく、仲居まじくらあゆみく
る、向ふのかたをすた／＼と、きかゝる男が目早くも、^{アモ}姉^{いもうと}よい所で行
合たな、^{オ、チ}兄^{さん}様與次郎様、よい所で逢いました、あんじらるゝはかゝ様の
は病氣別にお替りもあいかいな、殊^{こと}あゆさへも不自由^じお身、^{さそ}前^{まへ}の
おせいでござんせふ、^{モリ}別^{わか}は替りはあけれ共、いつ迎もふら／＼と
たゞ引立ぬ母じやの病氣、またが物を苦^くよしやるお、追付さつぱり本服^{ほんふく}
さしやる、こちもけふ此邊^{へん}へ用が有たゆへついでおがらの祇園^{ぎげん}まい
り、又是から外へよつていぬる所もあれば、このころゆるりと逢^あいよい
きませうさら／＼と小短^{こみじ}かき羽をり打ふり別れ行、氏よりも育^{そだち}よつ

るゝ人心男おとこぶりさへ、常つねならぬ、來かゝる井筒屋傳兵衛と、遠目も見ても
こがるゝ人、それとれまゆんがさし招く手まねよはまゐり付つ、そなたも今日の
祇園ぎんまゐりど聞たりしが、よい所で出くゝまゐた、氣をせいたの身請の
事こと互たがいゝ深いといふ事、人ゝ知れた二人が中、外へやつて、此傳兵衛
が男も立す、當分百兩計り手附をやつて、金のくさりでつかいで置く
事を手代の万八とまゐり合せ大かたゝ手附けの才覺サイカみでもまゐらす
通りわたしを身請えたがる客きやくが有るので、ほんゝもふ氣のもゆる事ことバ
かり、どんぢ出世しゅっせの身ゝあるとておまへゝ別れ片時も生きあがらへる
心こころいゝいとしやきつう苦が有るか此こゝまゐ色のわるい事こといゝな、其苦
もみんぢあわしゆへど、こらへてくだんせこらへてど、手を取かりし泣き
くどく折りからうしろへ、瀬口左内、夫れと知らするまゝふきを、聞いて
びつくり立のく傳兵衛マ、コリヤ左内サウチ、爰こゝへゝまゐいつの間かんもど、隠れもな

らぬまじめがほ、左内もかたはよく笑ひ、見れば遊所の女中そふなが
ひそかきようでもこゝに往來、人めよかしれば何のかの社へ參詣有る
あらばはやふくど追立る、詞も否とも云いねね、おまゆん、別かれ
行すぐる、傳兵衛お身も兼て存じのとをり、拙者もど關東浪人漂泊
の内わづかあよしみ、御親父喜左衛門殿の世話をもつて、今の主取り
龜山へ有り付て新參奉公、だんく御前の首尾合よく間もなく勘定頭
抑せ付られ、恩願譜代のめんくとも肩をならぶ身の立身、これとい
ふも龜山へ代り出入の喜左衛門殿の世話下されしゆへと思をあたふ
に存ぜぬ、此瀧口左内、心よかゝる其ほうの身持ほうらつ、御國へ出るた
び親父の噂、某此度上りしを幸ひ、意見を加へ、心腹をためなをそうど
是迄意見した、幾度か、したが若いときはたれしも有ならい、といふ
ものも見た所がよつぽとしみ付いたていたらく、得手勝手、手あ義理づく

よ、無分別むぶんべつなど出す時の第一が親への不孝こうせ世間の人の評判ひやうばんをしり、夫れ程の事わきまへぬ身でも有るまい、つまらぬ事の相談そうだんもしたがい、此左内がおんをうけた井筒屋の息子の身の上、聞きすては致すべきかどく／＼内へおいきやれさ、諸事しよじのほんほど、はやく／＼と立上る、傳兵衛はかたじけ涙なみだ、おなじみとて御懇意ごこんごう度たびの御意見ごけん見用けんもちひませぬ不屈をお叱しかりもなふ事をわけての今のお詞、中／＼わるふいうけませぬ、有りがたふ存じます殊ゝあなたが當お役ゝおかりあされてより、諸色さん用廉直れんちよくよまかりあり、惣かけや仕入れかた取りわけて親共が悦び、此脇差わきざしの小柄こづか迄も、殿様を拜領はいりやうなしたる程の我々が身の首尾合、これとすも皆あなただ様のは高恩かうおんはとりあし／＼、あだゝは思ひませぬ、其禮云いふゝは及ばぬ／＼身持ちを改めさへすれば此左内もうれしい忝はづかひ、ちと又晩ばんかと身が旅宿りょしゆくへも來たがよいと、心つく／＼瀧口は、宮居をさして

別れ行、あと、伏拜^{ふしおが}み傳兵衛^{まへべゑ}の涙^{なみだ}のうちよも、くどくどと、他人^{たにん}の身でさへ目よあまつ、ての意見^{いけん}親父^{おや}様の心根^{こね}をさぞとは知れどつどめの身よておしゆんが貞節^{ていせつ}なじむつれて可愛^{かあい}さ増し、退くものかれぬふたりが中、これも因果^{ゐんぐわ}のひとつかど、身をくやみたる一人ごと、うしろの方を官左衛門しづくと出來り、傳兵衛待てゐたと、聲かけられて泣きがほかくし、これ^同はく官左衛門様よい所へお出なさりました、此間お頼みなされた鐐^{りょう}の儀、三百兩又付けてが有るゆへいよくおはらひあされまするあらば、おしつけは、伸うりを手代万八が同道いたして参るはづ、夫れ又付ちとお咄しとすすも、は無心のすま委細^{いさい}の万八よ、ちやくのしく承知^{やうち}いたしてゐる、随分^{ずぶん}三百兩なら拂いやすふ、それがしも入り用の金子あれど、平日懇意^{こんい}の其方の無心、いやといふも何とやら氣のどく、當分百兩の用立ちやすふ、夫れはちか頃^{ころ}有りがたい仕合^{しあひ}もふあなた

もお手つかへあればこゝろ、太切な道具をお手バあしあさるゝ、餘儀なきは、無心やせしゝ、ほどくしん有て用事をたすといふもひとへよれかげと、禮の八百三百兩の、金ふりかたげいさせきと中うり勘藏同道して手代万八、よい所よ若旦那、幸い官左衛門様もれ出なされてじや、万八殿を伴ふて参りました、こちも見へる時分と最前から待ち心へ爰へと居ならぶ茶見世、傳兵衛の懷中へ八橋の鐐取り出し、勘藏との、ちの手代万八とはあじみそふあが、わしが逢ふたは此中初めて、其おりもいふ通り、出所のたしかなは、すあはちあきたのは所持の鐐、今相對すて三百兩で手を打つた、家よこそよれ井筒屋の若旦那が世話じやもの、何のそまつの有るものか、是代金三百兩と包渡せば万八もろども、金あらためて渡す鐐、たがいよ引かへ取りおさめ、幸い去れされきの旦那衆が、乞い望まるゝ此鐐買人の有る内急に見せねばあらぬ

しろ物、其内お目よど中うり、とつかはいそぎ立かへる。官左衛門の二
百兩、懷中くわいちゆうして立あがり、念ねんのため百兩の預り手形がたした、認めておきやれ身の
一、まずいてくると、立ち別れわかるべこあたの道へ、来るいたしかあけ屋の
六左ろさ、くど傳兵衛えう、招まねけ、程あく六さへもん、傳兵衛様この
ごろ内すますとをり、おまゆん様を身請そうと、望のぞみのお客きやくが手附を
渡しなされうと有るゆへ、則ち其に客がけふの爰へ見へておれば、今
相談さうだんも参りがけ、おせうしお事おれど、何をいふても皆金づく、是六左、
おまゆんと深ふかひ中といふ、人又知られた此傳兵衛、外へやつて立べき
か、時宜よよつてゐ生いきてゐぬ、また死るからいひとり死なぬ、それ
それ、此万八が腰こしおしやないが、身請を取りもつ六左衛門、一ぱんがけ
よまやつふりと、きみたがわるいわいな、首くびすじもとあらぞつとする
ないな、もしまやつふりといひされて、すきの酒も呑のぬわいお若もし又

さういふまへの方で、身請せう、おまゆんが身請せう世話を頼む六左衛門、それ手附け金百兩渡す、是でうちらのだんころは、いもふ何がさてく、おまへが身請なされるれば、おまゆん様もよろこび、私もしやつふりをのがるゝ、どつこもよまじやと懷中より、やたて取り出し手附の證文、まづ此金をちつ共はやく親かたへ傳兵衛様お出をまつと、金請取つて六左衛門いきくとして引かへず、跡へ横淵官左衛門、證文請取ふ出來て有るか、ホシなあはつたりとわすれてゐた、殊もこゝの判もなし手形せうも矢立の用意は、これ若旦那途中でそりや間ふ合ぬ、はて今六左衛門から請取た手附證文、手形をる迄百兩の質物、夫で此場を取りはからひ、手形したゝめばんなりと引きかへよ來たがよい、えからばさやうとくだんの一札手よ渡せば、身は近邊の兩替屋で金改めて直は旅宿へ、兩人共跡からと別れてこそは歸ける、跡見送て手代万八、官

左衛門様のおかけで、どふやらかふやらおまゆん様は繫ぎ留たで此万
八迄も大安堵、何とお嬉しうござりまするか、イヤもふうれしうのふて何とせ
うこれも皆そあたの働、お主の爲じや物、働かいでよござりやまよか
是からまだ跡金の工面じうめん、これも又此万八が見んごと働き出し
てお目よかけよ、頼むく、と悦こぶ折から息もそたく、六左衛門、大
汗よなつて走もどり、人がらよ似合ませぬ、おかほだけよ沙汰はそ
まいがかうした金を人よつかまし、手附けとい横道など皆迄聞かず、手
代万八、何とないやるおらが旦那似合ぬの、横道のと名を立て、手附け
の金よ何云分、そこつな事、ほざき出すと、そのぶんよは濟さぬぞよ是
手代殿、濟すの濟さぬのというりや皆こつちからいふ事、今請取た手附
けの金、いよがけよ念頃中の両替屋で改めさせたればみち贖金、とび
つくり包みをほどこし、見れば最前渡した金、さては中うり勘藏めが、ほつ

かり一ぱい喰ひしたか、悪くいやつと氣もそいろ、^{コレ}万八、しりやると
ふり此間わがみが世話で、近付きにあつたあの勘藏、そあたのあじみの
事なれば、町所もしつてゐるやろ、引きすつて來て此譯を、^{わが}オ、わしぢやて
て名染といふでもあしお前が直ぐつばめのあいたい、^ミ夫れをわしが
どうしてしるものぞい、ねがたいまいの金を、^そ粗末は取遣なさるゝかあ
ど取あへもせぬ顔付は傳兵衛の口おしさ、かけ出さんとする所^ゴゴヤまで
傳兵衛うごくなど、^{こへ}聲をかけて官左衛門、^{コナ}似せ金つかいの大がたりめ
大切ある道具の代金、此やうな似せ物を、さづけやうとまおつたあ、晝が
んどうの泥坊めど、たぶさつかんで引倒し金の包の目鼻の間、打付く
投付る無法のてうちやく覺へあき身も、^い云譯あく、齒を喰ひばる、無念の
なみだ、^{コナ}無念でも口惜くても、手向ひあらぬ身のよこしま、似せ金をつ
かまされ秘藏のつばを、かたられた上から、^{りしめく}旅宿へ引ずりぶちばなと

ど、引立る手をもぎ放し、ぐつとねぢ上突飛せば、ふりかへつて、左内殿、
手前よりいつからはへ、先刻よりやうすいち／＼見聞いたし
た、お聞き有たらやさいでも、えれた科人、引立るを、あせ留まつしやる
ぞ、あせ邪魔しめさるぞ、此瀧口がどいめまじたり貴殿のおため、
何と、サアたとへ傳兵衛誠のかたり似せ金しまいたせ、左様の吟味せい
たうは、當地の代官所より有るべき、事何ぞや他國仕官の身を持て、い
われざる吟味仕置、若代官所はさたとあらば云わけ、何とあさるゝ
ぞ、其儀のいかよおせきあされたとて、そこつ千万百兩の手形の出来
る迄取り置かれた手附證文、それある男へか戻しなされて、彼めを歸て
遣はされい、そりやなりませぬ、拙者が賣た鐐代の三百兩誠の金請取る
迄、此質物かへす事、なんじもよらず、成程は最も傳兵衛いつや
其方々借用した三百兩、只今急度返済する、此金を鐐代又官左衛門殿へ

進せれば、よせ金遣ひの名をのがれるでいかいかと、教いせねがどもかくもと、取り出し渡し三百兩、ヤしあなた様へ三百兩御用立つたおぼへ、さて物覺へのわるい男と、目顔でしらせおしゑられ、ばつといたゞく有りがた涙、是官左衛門様、中うりめよのめくどかたり取られた八つ橋の鏝、よせ金を取つた此傳兵衛が誤り左内様の御影まで、三百兩をまどいます、夫れ請取て最前の手附けの證文お返しなされませ、まとの金請取るからは、もどして、くれると證文投出し、どふ見ても中賣めど、うあづき合ふたてれん事、其儘で濟されぬ吟味する所でぎんみさせうとそこいぢわるき詞の針六左衛門は手附けの一札、取あげて引裂きすて、氣の毒な様子なれど、われらふせいの何とはんだん、どなたも是よと立あがる、左内の聲かけ、揚屋ちと尋度事が有る、おまゆんを身請せんといふ客の名が聞たい、其おきやくはと云はんとす

るを、く六左衛門何をうかくくど、しやべらずとはやくかへれ是は
したり官左衛門殿いらざるお世話、其客は何國の誰名は何と、其お
かたは、どふもこゝではすされませぬ、其はづゝ、サもふ何も用い
あいちやつといぬ、其元又はいらぬお構い、何官左衛門殿我々
國元を出立の砌遊所へ足ふみ堅く停止と、御家老中々厳しく仰渡され
たは、貴殿も覺へてござらうがの、いかも、夫またあの者が名を、六
左衛門とはどふして御存、それは、物でござる、とぼけた顔めさつ
ても遊所通ひり明白、めつそうな左内殿、身はついよあの者が所
へ、入こんだ覺へもなし、あふたもたつた今が初め、いなる、初對面
のあの者をたつた今六左衛門と、かれが名を知て呼るゝはづがない、此
趣きを本國へ申し遣はせば其元の御身の上、そこを朋輩の好身、今
日の所を聞のがし、仕其かはり傳兵衛が今日のまだら此場かぎりよ

風聽御無用、御得しんか、若し不得しんから、おしゆんが身請の客の名
迄も、せんざしぬいて、いやはさは左内殿、何のまわ不得心傳兵衛はも
じより親喜左衛門は出入の町人、懇意の中、何事も此座切りよ、さらり
こそ、とかくかよふな所は長居い、おそれおささへ参ると云捨て、立かへ
れば跡は揚屋も立場なく、こちも長居はおそれ有り、早ふいのふどこそ
くど、我家をさしていそぎ行、まがり切たる瀧口左内、万八め、儕よう
傳兵衛をそより上たあ、此一まさせんぎのしやうもあれど科人も出來
且は諸方のかより合、何よも云はすも濟してくる、何傳兵衛、身も喜
左衛門は逢ながら、同道して立歸ん、いざおいきやれど瀧口が、どもあい
かへる傳兵衛も、そこさみわるく万八も跡は付そい立かへる、道引ちが
へうそくど、來かゝる横瀬官左衛門、こあたよりも勘藏が、ちらど見付
けて立寄れば、万八もはしり付、今日の互に上しゆびく、左内めがほ

くわけかけ、さてひやいめ、此官左衛門も氣をひやした、其かはり又はまんまと三百兩、ひやいあめゝあはぬは勘藏われひとりもふ其替、おまへを待合して、さつきよからそこらあたりをぶら／＼、八橋の鐐戻します、こちからも分け口と、百兩づゝを二人に渡し、さて身があたりまへの百兩を、おまゆんが手附けに渡し、其内ゝ金の工面、是といふも皆万入その方のかげ、私も勘藏も、お前の手さきをはたらく、わけ口の金がほしさ、左内めゝ穴を見られたから、まづぼの出ぬうち、爰から直ゝ欠落、此勘藏も當分の影をかくさゝやあるまいかい、何ゝ付けても此百兩、さうまい／＼と三人が立別れてこそ、行すへは

○揚屋の段

其元は、主人鹽谷の讐を報ずる所存はあいにか、けもあい事／＼、家國をわたす折から、城を就ゝ討死といふたのは、御臺様へのついでやう、時ゝ貴

様が上へ對して朝敵同前と其塲をついと立た、我等ハ跡よしやちバつて居たのいかぬたわけの、所で仕廻つたかき、墓へ參つて切腹と、裏門からこそく、今此安樂のたのしみも貴殿のおかけ、昔のよしみわすれぬく、かたみをやめてください、いか様此九太夫も、昔思へバ信太の狐バけあらひして一つこん汲ふか、由良殿、久しぶりだ、盃、またてうだいと會所めくのか、さしおれ呑む、呑みおれさす、狂言のおじやまながら、官左衛門様へや上ます、御國元より御狀が参りました、何國元々の書狀とや、どれく、亭主是へく、フ、ムもふこりや何でもない見廻の狀、何事かと思ふた、家來共も氣のつかぬ、爰迄もたせておこすよ及ぬ、はづみきつた狂言の大事な所で腰がれた、残念至極と拳を握れば、仲居げいこも氣の毒さ、もふ御家來衆のぶすいながら、いらぬ狀おこして、大事な所で間がぬけたのふおたよ殿おそめどん、官左衛門様

の由良之介ゆらのゑらいもの、尾上梅幸おのへ ばい かつをて退じやうのほく大ていうまいこつちやないど、笑わらひをかみてきげん取ともうお相手あいてふあつた此久八叶こやいませぬ今歌舞妓かぶきではがねをあらす、三五郎や十藏じざうふ、おまへのげいがやりたい、いらぬ所ところふげいしやが有るあるうゑらいもので有たるがの今宵こよひの身が思ひ付きで、仲居まじりのしのき狂言きやうげん、此あとがふたつてふくで、娘のおぬいがぬれがみの長五郎、其あいだの狂言きやうげんふ我等がおどり又仕らふ、く何なんうたつてくれろ、ママあつあがつてささッッこぼれるおたつ殿かへでうし、うれ高てうした、たつ田川たがわでいもみちを流ながす、われは君ゆへ浮名うきなをあがす、くやんや、どうだ、きつひものゝく、まだあろうが、くハシニもふ真まどもくハシママ猿さるでござりますと云いすてよぐれば、につくひ仲居めれうけんならぬとわれ出す、亭主ていしゆはかけより手そりたいはう、久八も押止おしとどめ、女子共おんなどものあだ口くちは腹はらをたつと、旦那だんなぶすい、く

さく下ゝ御出あさりませ、うしてもふかしゆんさまが見へるじぶん、
兎角きやつが事玄や、わけづめゝしてくどけ共、帯解ぬ玄やうはり者、こ
の横淵もせがつきたれど、そこがいきはり、是非とも傳兵衛と手を切ら
せ、女房よせゝや顔が立たぬ、六左かねて相談して置いた、身請の手つ
け百兩はずあゝち今宵わたさんと、持参いたいてゐる、かん玄んの狂言
、國の飛脚で間ぬけがする踊ゝおあゝ共ゝばんでうをぶちこまるゝ
何とやら氣がめいつておもしろない、座敷をかへて酒よせう、ホシニそれ
それ、いかふざしきがめいつてきた、是からおく座敷、娘どもいどつ
ちへいたおぬいおくゝと呼び立て亭主の伴い奥座敷勝手のかたゝ
氣のはれぬ酒もちやわんでおぬいがほろよいきげん、おたよどんひと
つ呑んかい、またおぬいさん酔んそなへ、島田わけへみのかけて、髪も衣
裳も出来てゐるゝ、狂言のこしがおれ、おまへのぬれがみの長五郎を見

いで残念^{げんねん}じやわいさ、^{ホンニ}大たぶさのまへ髪で、肩^{かた}ふつての身あんばい、つやのけて仕ていさいぐへ、又おたよどんのいらいじやよ、^{チア}お前をいらひては、どこぞあるぞいさい、せいもんわしやたれもさい、おまゆんさんよあやかつて、傳兵衛^{はんべい}様のやうお面白^{おもしろい}間でもありやよけれど、何いわんそおぬいさん此おたよがつてゐるわいな、^{ホンニ}もふ此おしゆん^{さん}様もあぜ遅^{おそ}いこつちやぐへ、いつそおぬいさん何ぞ彈^ひかんか、^アく何よせうさ道行よせうかいな、それよかるそんならあいごのわかぢや聞んせと、ねじめやさしくひきあして逢^あふと、おをかた糸^{いと}のよるとあく晝どもわかぬ^{わぬ}閨^ねのうち、枕^{まくら}ひとつの床^{とこ}のうみ、おしゆん、懸^かよおもやせて、よそのもん句^くもわが身に、いど、思^{おもひ}のまさりぐさ、おぬいさん今^{いま}さんじた、^{ホニ}おしゆんさん二日^{ふたひ}酔^よといふ色じやぞへ、^ア二日^{ふたひ}酔^よやら三日やら、日さへろくよ得^え費^ひへぬ、^{ホニ}どうりいなあの官左衛門^{くわんざゑもん}づらが、おまへのお出が遅^{おそ}

いとて、やかましうぬかしくさつてならぬわへ、そして奥座敷おくざしきのお客が、
おまへと盃さかづきがしたい、どうぞちよつとありと逢あひしてくれとたつての頼たの
み、おぬいさんも一まよこちへと、おたよは二人を伴ともひて、入るおくさ
しき、ちや屋のはんじやうおく口のとりしめもなく忙いそがしき、折ふしおろ
めがとつかはとれみよどんく、何ホ、チぞやとかつ手から、何詞じや所か、さ
りく、ごんせいのふ、たいていやおふかた、ひよんあこつちやわいのふ、
奥おくの客きやくが、おしゆんさんを今宵中こんしやうちゆうも身うけするといふわいのふ、ヤア、事
じやく、どうぞ傳兵衛様へ知らせたいものじやが、イ、くられまらした
ら、どんな事が出来やうもしれぬ、どふぞまゐたいこもちの久八きやちさんよ
逢あいたいの、おや、あの久八きやちさんは傳兵衛さんのだいぶん恩おんになつた
人ぞやといふ事じやそれゆへ傳兵衛様のひきかた、よんでこふかと二
人して思案しあんのひきかたおきと同士折どうしせりからこゑたへ出る久八、二人の見る

より、何^{なん}して居さんすぞい、くちよつと思案出して下さんせいあふ、
もふ、さつきよから思案して居れど、まゐい狂言の趣向^{しゆかう}はない、しんきそ
んきそんあこつちやないわいあ、^{ドレ}耳^{みみ}あこさんせかうじやく、わい
あ、^ヤういつは事じやく、^{アイ}官左^{くさ}めが身うけの手附け、どぬかしく
さるゝあきはてたよ、今宵^{こんよひ}中^{なかつ}も身うけするとは、^{シヤ}事じやく、たいこも
つが役^{やく}あれば客の呼^よぶ時^{とき}いどのやうな座敷でも務^{つと}めねばあらぬゆへ、
官左衛門めども附合^{つきあひ}ていぬれど、此久八はどこまでも傳兵衛の味かた、
こちのもしん町^{まち}のたいこもち、傳兵衛の大坂へ出てござる時^{とき}天満祭^{てんまんまつり}
で喧嘩^{けんか}仕出し^{しだし}相手^{あいて}をあやめて、直^{すく}まらうしやする所を、わしを傳兵衛様
のひかしやつて、金出して扱^{あつかう}てくださつて、それから京まで連^{つれ}てござつ
てきつひ世話^{せわ}、大恩^{おん}のある旦那^{だんな}なればどこまでも世話せよや、あらぬ^イ
ゝもふそりや事じやく、^{サア}じやよよつて思案^{しあん}量見^{りやうけん}を、ちやつとく、

く、其様よせばまういふと出かゝる思案も引込でしまうわいな、か
うじや、どうじやいあ、あるぞくこいついどうであらう、どうじや、
たかゝあの客にこのたんばやの内の客、爰の亭主が呑込で相談の出来
ぬやうよ、ちやく入れたらじやみそうあ事、その亭主をだきこみやうは、
娘のおぬい、むすめのうちでのたてもの、きやつ呑込んだら、できる事、
すつと氣のさけたとをりもの頼んだらいやとはいふまい、そり
やわるい、その思案わるい、おそめそりや何んとして、おみよど
んのしらずか、あのねぬいは傳兵衛さんとわけがあるはいあ、それじ
やよよつておしゆんさんの身うけときいたら、ありやよろこぶであろ
ぞいな、いひ出してけつくわるかる、いしまふた、どうがあと、三人が小
首傾け智恵囊一どよしほるおりもおり、奥よはねぬいが腹として、久八
さん用があるとこよぞい、こへはむすめのおぬい、爰へ來ていはなし

の邪魔じやま、二人ともそこつちへおじやとつれて一間へ入るあどへ、たしゆ
んい、しほく立出て、心もうかす氣もすまず、あん事じをむねをいためし
が、たがいよかいるあ、かはらじと、いひかいたとばを反古はぐよきて奥の
客よりけ出され傳兵衛さんへ濟すむべきか、どうぞ逢あいたいしらせたい
と、おしゆんは涙なみだのひとりと、おふせもしばしとだへして君ゆへ心いた
むなる、傳兵衛が内さしのぞきつと入る、傳兵衛さん逢いたかつ
たといだき付けば取てつきのけ、イふるめかしいその身ぶり、此ごろ
の官左衛門があげづめで、おれがとばわすればてくさつたろ、あたふが
わるいけがらいいいど、しかけるくせつ、おしゆんはかほをふりあげて、
うらめしのお言葉ことば、あんのわたしとつゆほども、外へ引るゝ心はない、お
まへよわかれたその日より、あげづめとする官左衛門、ふつてくふり
つけて、内へもどればそのあどへ茶屋ちやからのつけとけ、おやかた様よ

いしかられる、それもたれゆへおまへゆへあまりたよりがないゆへよ
とふろお顔かほを見るやうよと、神さままでをせびらかし無理むりな願ねがひもおま
へよあいたさすいおせりふも打うこえてぐちよあつたも誰たがわざと、義
理りも耻辱ちぢよくも外聞ぐわいぶんも忘れ果はててもわすれぬおまへ、それをほか氣もあるや
うよ、疑うたがひ敷ふバおまへの手にかけて、殺ころしてやいのと膝ひざのうへ、身を任まかせた
るおぼこさは里さとよ馴なれてもかひゆらし、傳兵衛も心とけ、間、ホ、テ疑うたがひはれたも
ふ泣なきやんぢ、かんぶんしや、目ごころから悪いと思ふてゐる官左衛門め
があげづめて、一ばいよ氣がもめて、つねからほか心のあいとけりあ
がら、腹立はらたちまぎれ、口へ出るまよ云たのじや、ホンニあの官左衛門めが、祇園ぎんで
の三百兩も、てつきりいひ合せたかたり事、手代の万八まんぱちめを吟味ぎんみして、事
のしだらをたゞさうと思へども、その場よりかれめもかけおちあの官
左衛門めがほかの者おらしやうもあれど、何をいふても出入屋敷やしきのお

もやく人、それゆへも手出しもあらま、残念むねんを胸をさすつてこらへてゐる、ホ、チだうりいあるもつともぞや、それほどぬしの憎んでござんす官左衛門、何しよまたがふ、おび帯解ものでござんそ、きま急まはあさよやあらぬことがある、マ、こちへも手を引いて、しんく辛苦をわくせきとゝもないてこり入よけり、おから亭主が、おそめ、おうめいぬか、ア、どかつてから、おだあさん、おくよござるかおしゆん様を身うけなさるゝお客かへ、チ、座敷がさびしいちやつといきや、お亭主それへ参つて御意得ませうと立出る、とし年も六十ちのおやちきやく、おれしゆん、おど名をきいて焦れてきた此おやち、身うけして連ていぬる氣今宵中又頼みます、おと金やとを宿もとへいふてやるまの手附け金とさし出せば、お、チこちらよも先約があれど、こよひ中とあるからは、おあたの方へ、しゆびなるやうよあいたいしてさんじまじよと、お立あがれば、おあたよりその身請

まあ待てもらひましよ、ソレヤ誰じや、イヤわしでござんすと聲をかけ娘のふぬいが狂言じたでの大前髪肩からあるく大島のすそ小みじかき草履下駄つよそうあかほ、かいゆらし、おぬいこりや何じや、イヤわしやぬいじやあい、ぬれがみの長五郎じや、おしゆんが身うけの此ぬれがみがさゝぬ、イ、つと長五郎が邪魔するのでござんす、イヤこれこちらが身うけしてつれていぬるといふおしゆん、何ゆへじやましめさるぞ、イヤ身うけをまつてもらひませうといふ譯、あのおしゆん、は傳兵衛といふて深いまふがござんす、それを又何してわしが世話や、くと思ひん、え、よが、その傳兵衛様、い、わしもちつとした譯がござんす、それじやよよつておしゆんさん、と傳兵衛さんの中をさきたがると思はれて、い、わしが女が立やんせぬ、こんりんざい世話やいておしゆんさん、と添す氣、それゆへ男だてのぬれがみの長五郎、あつてたのみさす、こゝを聞わけて、おやぢ

さん、その身うけ止めて下さんせ、頼みましたと立役せりふも所のとくどかし、おそめの手をうちあつばれ女子じや、富十郎が女伊達そこのけじやど、いそ／＼すれば、こあたのしさい聞きとけ、此おやぢがよいとしをまての色ぐるひと、一と通りのおかしくおもひしやろが、わしが身うけせうといふも外の手へわたすまいため、こなさんのそのたのもしひまんでいを聞くから、わしが所存も打あけてはあします、聞て下され、わし其傳兵衛が親でござるわいの、耻をいね、理がきこへぬと、わしが出生の遠州濱松だん／＼と身上しもつれど、う／＼はては紙子の身のうへ、子供のときおぼへた東北のくせまいを、うたふて立つた井筒屋の門口先の喜左衛門様の慈悲ぶかい生れ付、悪ふもろだたぬ風休不便な事と呼込んで、こちが成長のはあしを聞き、よみかきさん用の出来るを取得しひきあげて手代格、ありがたい忝ひ、どふぞし

て此恩をど商賣よりき身をやつし、一つ呑だ酒もやめ煙草は固よりば
なかみ紙屑籠からとりつかひ足袋はかす頭巾さす、十八年があいだ
惣嫁一つ買べこそ、花の都に住みあがら芝居の何をするものやら親方
大事家業大事と精出したが、一家衆の目より留り先喜左衛門殿死去の
後此鬪式を立兼ね其方と家の娘もめあひされ、我名も直喜左衛門と
改めて、大名高家のかけやとはなりあがつたるわしが果報、其後悴傳兵
衛を産おとした女ぼうといへどむかしの主あり家すじと心いつばい
介抱したれど、十年以前よりい往生わが子ながらも傳兵衛、此家のま
この血筋と大事くが餘つてあま育てしが親の眼を眩まえて、おふ
くの金を傾城買ふつかいすてる身持放埒、どふぞしたら直ろうかと、心
を痛め暮せしがつくく思案えた上で夫れ程あれがすいたものなら、
おまゆんを請出し女房も持せてやる添してやる、どれほとしみ付い

た中かど、やうす親あがらよい年しての揚屋ちややばいり、もし傾城けいせきの持たされぬあど、より嫌きらひして心中事しんぢうごとの世話せわものゝあど作つくられるやうあ無む分別ぶんべつなどした時の、井筒屋いすぢやの血筋ちすぢのどんど絶たへはつゐ、うれが悲かなしいとまたふびんが餘あまつてよりの急きうの身請みうけ、おぬい女郎ぢやうらうの道をたてし、男俠だうぎやくの、ぬれがみよあつての願ねがもしひ今のいりわけ、忝かたじけなふとざる、賭うけふとざる、そんならかうしませう、此身請こみうけのいちまきり、おぬいどのゝ預あづけるから世話せわながらつゝこんで世話せわやいてもらひませう是でい道みちも立たちましょがの、うゝわたしが言葉ことばを立て、身うけの世話せわさせて下さんすか、忝かたじけないどれい云場いふばなれど、ぬれがみの長五郎ちやうごらうが預あづかりました請負うけたぞへ、必ず今宵こんよひ中ちゆうは其身請みうけを、ホ、チ、違ちがはぬ證據せうこおしゆん女郎ぢやうらうをこゝへ呼よんで下されアいゝわいから様子ようすを立聞たてきこくおしゆん、傳兵衛でんべゑは親おやのお慈悲じひとありがた涙なみだおしゆんを連つれて出る久八くわち、思おもひがけない親おや旦那だんなさつとさばけた也

取捌とらまきもふ拜がらんでいやんすおぬいさん、わしやいやいのおしゆんさん、世話せわするいぬれがみが役やく、これでわしも立ちやんした、ざつとせりふが治おさつた、是こゝから奥へいて酒さけよせう、ほんはん又旦那さんうふじやいやい、兎角とかく浮世うきよはいろじやへ、さわざよつれて打連て入るや、其夜も後夜ごや近く奥からそつと横瀬官左衛門、様子立聞こなたへ出、あの喜左衛門めが、今夜中も、おしゆんを請出しかるとは、思ひがけあい事、兎角とかく爰こゝの亭主ていしゅめも、朝間あさの久八めも、傳兵衛が最負ひいきして身どもが詞こといどりあへぬ、いつそ親方おやを直じきと呼よんで、逢あたいとい思へども三百兩の身請の所へ、此百兩斗りでの詮埒せんらちの明ぬ事、國元くによとへ云てやる間もあい急きうな事ゆへ、金のさいかく難義なんぎ至極ごく、いつそおしゆんを人しれず、ひつさらつて退くより外ほかの思案しあんない、そふじや、とつぶやく所へ、奥々こなたへ出て来るおしゆんものをも言いわを官左衛門じつと小脇こわきひんだかへかけ出すしろへ久

八が、どつこいやらぬと引戻せば、邪魔ひろぐ、おど踏飛す、足首とつて久
八が襟より下へまつさかさまふみ付けくふみのめされ、命からく
官左衛門はうく逃て立歸る、みなくこあたへはしり出、よいざま
よい氣味と笑ふをりから、はしつて来る、手代十助、唯今瀧口左内様より
さうのほつかひ、氣遣いしと喜左衛門狀箱とり上封おしきつてよみ
おわり、お國もどより急ぎのほ用筋申し来る、さう又談じたきそじある
よよつて、たゞ今旅宿まで來いとの此ぶんてい、何は亭主身うけの事を
今夜中よりあらわけてと思ひし、今聞るゝとをりの譯あれば、わしは是
からすぐよほ出入屋敷のほ役人のもとへいぬる程、ほ用すじの濟次
第こゝへ戻つて明日の早くと金おこして埒明けましよ、傳兵衛のあ
どよのこり何か、相談極めて、もどりやいの、みなの人頼みまそ、そんなら
おかへりおされますか、おさらばさらばとこへく、よ、仲居が見れくる

厨垂たれのあかりを、てらし出て行

○中之卷・河原の段

名も高き、四條河原がわらも、ふゆざれて川風寒かぜさむく吹ふきすさび、ゆきしも浪なみの石
ばしる、水音みづおとまでも夜よるいなを、最いそしんく、と物ものそごく、曇くもる空そらより我胸わがむねも
戀路こいぢよくらむ官左衛門、万八勘藏引つれき連つれて立止とどまるり、何でもおしゆんを引
さらつてと出かけた所、たいこ持の久八め、邪魔まじまされてさんく、の仕
合あ、すこくと戻もどる所、汝等なんぢら二人、へ行いあふたこそ幸さいわひ、今夜中こゝろよりうけ出し
て、喜左衛門めがつれて戻もどるとぬかしたおしゆん、此河原こはらも待まちあひして
面おもてをかくして引つかたげ、どこへなりとも退のくりやうかん了簡まじ、それよこんす、何か
あしよおまへのだんびら、すべと引き拔ぬいてひらつかせたら、他ほかの奴等やつら駕か
籠かごを投なつて逃のがるいであ、そこでくだんをかたけて退のくのじや、万八ぬか
るな、ちがつてんじや呑みこんだ、もし邪魔まじまするやつ、いしらども頼たのんでか

た付けさす、我等^{われら}も任せ、ひと走り往て頼んで連てかふ、コリヤできた、そんならちつとも早い^{はや}がよい、走れ^{はし}、万八^{まんぱち}、逸足^{いそく}出して驅^{かけ}り行、ある工^{たくみ}のありぞどの知らぬ井筒屋傳兵衛^{ふでづま}の、わが家へ戻る^{もど}辻駕籠^{つじかご}も道を急がせさしかゝれば、そりやこそきたんと、ぬつと出、提灯^{ていちゃん}ばつたり切り落^おせば、駕籠^{かご}昇^{かき}ども、わつと驚^{おどろ}き逃散^{にげ}つたり、^三狼藉^{ろうせき}と駕籠^{かご}よりも、飛^{とん}で出たる、傳兵衛^{ふでづま}が顔^{かほ}見てびつくり、^四わりや傳兵衛^{ふでづま}か、たまへ横淵^{よこぶち}官左衛門^{くわんざゑもん}様^{さま}、れのれの中^{うち}より勘藏^{かんざう}め、よくもゝいつぞやの贖金^{あせ}を掴^{つか}したな、れのれもあふて此詮議^{せんぎ}がしたかつたないゝ、^五そこを蚊^かどんぼめ、けれう人めなけりやよけれ、大きな聲^{こゑ}でぬかすなやい、よせ金の吟味^{ぎんみ}がしたふても所詮^{せん}わが手^てもあふ此勘藏^{かんざう}で、ないわいやい、あた忌^いしいと踏飛^{ふみとび}す、足^{あし}くび取^とて拂^{はら}ひのけ、心得^{こころえ}がたき官左衛門^{くわんざゑもん}様^{さま}、かゝる悪者^{わるもの}を手^てもつけて、何ゆへ此傳兵衛^{ふでづま}も狼藉^{ろうせき}をさせたまふぞ、^六その子細^{しさい}云^いて聞^きさん

汝が親喜左衛門が身請して、連歸おしゆんを待伏して引つさらへ、かた
げて退んど最前から待て居た此官左衛門、駕籠も乗たのおしゆんぞ、思
ひの外は傳兵衛さ、おまゆんはどこへ片付けたさ、それぬかせぬかせ
くどかさだかあり、こなたはわざと逆のす、おしゆん、親共が身
請を、今夜中またして連歸るべき筈なりしが、は國々急の用金す來
り、おしゆんが身うけの明日と約諾いたし置き、親共儀の瀧口様の旅
宿へ先刻参上、これよりよつて某し事も、跡より唯今まいりがけ瀧口様も
あまた様とは判談もあされたから早々歸宅然るべし、身も親共が待
兼べし心せかれいへば先へ参りいといひすて立を引きといゆ、どこ
へく、一寸もやるとならぬ、身請の明日へ延ひたどあ、いまくしい
手はづ違つた今夜のしだらおのれに知れたから、此儘で戻されぬ
さそふじやく、そやつをかへしていけ口たしかれて、ちとらが身

の破滅はくめついつそ旦那一思ひひとしひま、この官左衛門も其りやうけん、何傳兵衛、此横淵官左衛門このよこぶちくわんざゑもんの、汝が出入屋敷やしきの重役おもむき人、身が惚ほたと聞かべ、ねしゆんと手を切り離はなれべき筈はずなる、親喜左衛門までがひとつゝなり、身請して内へ引きずりこみ、官左衛門くわんざゑもんも鼻あかせんとは、言語同斷ごんたんとだん憎にくき仕方かたのれといふ色男いろおとこが有ゆへあ、おしゆんめおしゆんめふりつけられた腹はらいせよ、思ふ存分おもふぞんぶんさいあんだ其あとで、息の根いけねとめてこますのじや、譬たとへじたばた騒さわいだとて、所詮ところせんらちのあかぬ事、我手われてあふれれじやない、諦あきらめて泥水どろみづ喰くらへど、雨あめのたまりへどふと投なげ、あたいまゝしといく平足ひらあしふ、ふみ付け蹴け飛ばしさいなむなぞ、傳兵衛もはざしみはざり、無念の胸むねを撫なさす、何官左衛門様なにかんざゑもんさま、此傳兵衛は卑いやしひ町人まちど、蹴けれても踏ふれても苦くるしからねど、此脇指わきさしの小柄こづかの、殿様より拜領はいりやうしたる祐乗ゆうじやうが作さくの三疋獅子さんびしし、この小柄こづかを、家來けらいの身として、土足どそくにかけても勿体もったいなくもござりませぬか、それけ

れけいふな、たとへ以前、殿の物なりとも、おのれが手は渡つたから、素町人の家の道具踏だとして蹴たつて、何の勿体ない物か、小柄ぐるみよ、ふみよじつてさいあまん、此勘藏は、もとより小づかよかけあいさいおのれがやうお愚鈍な奴は、うどんぶみよまてこまさんと二人まて踏むやら蹴るやら河原へ投げ付け踏付られ、餘りといへば非義非道な官左衛門様、出入屋敷の重役人ど、無念を堪へて手向いせねば、つければつたる非道の打擲、さほどおしゆんよ執心あらば、どくよも身請いなされいで、腹立ちまゝのぶち打擲、武士よ似合ぬおされかた、その金が出るくらゐあら、似せ金のぐら事かたりいせぬわいやい、その金の入橋の鐐のとり、是ある中うり勘藏、手代の万八どはだをあんせ、三百兩ものしたのじやわいやい、さてこそそと傳兵衛が、無念よ無念重ある思ひ睨みつけたるはら、涙官左衛門はせしり笑ひ、口惜いか大聲お

りてとこぼへる腹一ぱいさいなんだおとで息の根どめてやる、これが
此世の泣かめあけくほへる大べらぼうめと立ちかゝり又踏か
ればもう是迄と官左衛門が肩先ずつぱり切下れば、勘藏の氣も狂亂
切つたとの呼りあがらいつさんよこそ遁て行ふか手あがらも官左
衛門、抜合せて切り付れば、てうどうけとめ、さつさき鋭くてうく
危うかりける有様あり、痛手は堪へかね官左衛門河原へとつさり倒る
るをたゞみかけて切りつくれば、残念無念のうめきとゑのたうちま
るをなぶりざり、數个所の疵は官左衛門狂ひ死こそ心地よきをりから
来る、人かげよ、既よ自害と傳兵衛が覺悟の刀取直すを、早まるまい傳
兵衛様へく待て下さんせと聲かけられ、そういふの久八おしゆん、そ
なたの事を根よ持て最前より官左衛門が非道の打擲堪へるだけはど
こもえしがどふもかふもあらぬ仕儀もあり胸は餘つて手はかけたれ

ば、人殺しの此傳兵衛、すくも此座で死覺悟、親人さまの咎もさぞかし
と思ひのすれど、此期もあつていせんあき縁言、不孝のだんくよきよ
ふも詫してたもと、又取直すを久八の押止め、河原も喧嘩があると聞た
ゆへ、おまへの事が心もとなく、おしゆん様諸共走つて來た、人を殺せば
死るといふ最の事ながら、喜左衛門様や、これなるおしゆん様の、歎かしや
る所をも思ひやつて、邊り人の居ぬこそ幸ひ、早ふ此場を立退て下され、
落て下され久八さんの云んす通り喧嘩と聞て胸騒ぎ、かういふ仕儀
もあらうふかと、脱て來たこのおしゆん、私しが事から起つての人殺し
の科何とせう、そふいふ事なら死る覺悟の道理ながら親戚さまの歎き
や、わたし悲しさを推量して、どこの山おく、いづくのうらよも遁れる
だけの逃かくれても、どうぞ死すよくださんせ、死る事あらおまへ獨死
しはせぬ、わたしもとも死ぬ覺悟おまへを先立て、わしが身が一日生

てゐられうか親孝行と氣を入かへ、未練卑怯^{れんひきやう}お心も、ちつとは成て下
さんせと、身を投伏^{なげふし}て泣^{なき}ゐたる、親^{おや}への不孝やそなたの歎き、思ひぬ
はあらざれど、人を殺した此傳兵衛、存^{ながら}へる所存はない、とめずと放ちて
殺したく、はてさて聞譯のない、おまへの恩もあつた此久八、悪い事云
ひはせぬ、たつた一人子のおまへを、家の血筋^{ちすぢ}と喜左衛門様の大切がり
あとさき見ずの、不丁箇^{りやうけん}も出よふかと、おしゆんさまの身うけなさるも
悲^{かな}ひ事のないためのお計^{はから}ひ、そこをよふ聞分^{きくわけ}て、止まつて下さるませ、そ
れ聞わけぬもなければ、そんなら落^{おち}て下さりますか、夫じやても此
死骸^{しがい}、あとは我等よお任せあれ、おしゆんさまも此所よ長居して、人目
よかつてい傳兵衛さまのためよならぬ、早ふうちへ戻らんせ、序よ傳
兵衛さま、こつろりとおくつてやらんせと、いふよおしゆんも心せき
く傳兵衛さん、はやふ退^のいて下さんせ、もし死ないで叶^{かな}ぬ其時は、わ

たしも一しよ又死出の旅たび、ハチ、おまゆんさま、おまへまでがそんな事、千のまんと言葉かづ云ふてゐるうちひまがいて、何をうちく、はやふく、と、せき立られて傳兵衛、心おらずも遁のがれ行星はしの光ひかりも後影うしろかげ見へる間、延びあがり、やれうれしやと始めて吐息といきつく折をりから、向ふへ万八がしらども引きつれ走りはしりよる、かくと見るより悔びし、無二無さんよしめかかるを、ひらりとかわして身づくろひ、かどうどつれたる泥坊どろぼうめら久八が手なみを見よと、左右前後をあい手どり、手を盡つくしたる手練しゅれんの働はたらき、叶かなぬと万八はじめほうく逃のがれにげて行、勘藏くわんざうが訴うたへまや、所の代官と手引ぐしかけ來り、勢州せいしゅう龜山かめやまの名家けいめい來、横淵官左衛門を切り殺せしと注進ちゆしんあつて召捕めしとりむかふたり、尋常じんじやうと繩あひかゝれど、よばるゝ聲も久八がどがをわが身も引きうけてとり手の前もどつかと座し、人を殺せば覺かく悟ごの前、御苦勞ごくろうあがらと手を廻せば、早くもかけたるしほりあり、めしう

ど引け

○堀川の段

おなじ都も世もつれて、田舎がましの、うすけむり堀川邊に住居して後
家のみさほもたつ月日、琴三味線指南やも、合の手もつれ、さもつれを、保
養がてらの薬風呂、あふぐも我を遊團扇、目さへ不自由な暮しなり、たつ
様待どふも有ふあそびとして何やらのさらへで有つた、うれ鳥部山
時代えんじう事、會でもひくのなら、おまへん女の方、おしげ様の男
の方、掛合いも唄ふがよいぞへ、おまげ様のあわりもわたしと掛合
ようたいませうと、おいてひく手もえほらしき、女はだいの白むくや、う
へむらさきふじのもん、中着ひざやに黒縹子の帯、どしん十七、はつ花
の、雨もえほるも立すがた、おどこもはだいの白小袖もて、くろさりんず、
色あざざうら、廿一二の色ざかりをば、戀といふ字も身をそて小ぶね、ど

こへ取つく島とてもあし、鳥部の山にそなたぞと、死は行く身のうしろ
がみ、ひく三味線の祇園町、茶やの山衆がいろ酒よ、みだれてあそぶさわ
ぎ合、あのおもしろさを見るとき、くしはれがないあのおもしろさ
を見る時は、あのおもしろさを見る時、よし、それゆゑのそなたこそ
れがしが、去年の初秋七夕の座敷踊をかね付けて忍び逢た事思ひ出す
けふは、そこ迄せいが出るほど有て、きつう手も廻り出した、もふく
何處でひきあさつても、耻かしい事はないと、聞て笑顔のかたをなみ、又
明日といふしほふ、おつるに立て歸りける、母を大事と油斷なき身すぎ
も輕き小風呂敷肩のせたる猿まはし、戻りいいつも日暮前、與次郎は
いさせき門口から、母者人今戻つたぞや、あふ戻りやつたか、さぞひも
じかる、茶も沸て有膳もそこよして置た、とよ戻つたか、今朝から子
猿めが親を尋て喧しい、ちやつと傍へやつてやりや、くろふでこんし

よども、ちやつと乳を吞してやれ、與次郎、そなたが孝行としてた
もるゝ付、わしが此かゝの病氣も、いつ本復する事で有ふと思へば
疲れの上は猶つかれる、僅な弟子しゆのよせいや、わがみの働きでこの
養生がある物かど、思へば薬も毒とあり、母でいふて子供のためより、
呵嘖の鬼と思へるゝ、鬼の冥途は有ものをつれあの老の命やど、身を悔
みたるむせび泣き、哀れもまたいぢらしゝ、母じや人、何を云ん
ずぞいのふ、其やうゝひそやうあ身代じやと思はしやるか、此間弟子入
した米やの息子殿から、あがゝおふくろの頼いで、喰かしかつても悪
るからふと云て、雪か花かど、すすやうあ白米の仕送り店ゝの旦那衆か
ら、何あど用が有るから、云ふておこせ、もし出養生さじや、そなら幸
ひな隠居所もあるほどと云ふてくるお方もあり、羊羹、饅頭、生魚、近所
隣へそふゝ、すそわけもしられねば、鯛赤貝の類、横町のすしやへ御

賣、案じる事の微塵もないや、それゝまだくく、氣の毒あり、此家主が
此家を居なりゝ買てくれぬかと頼れる、いやしの、く、あだ世話な
家持よりは金持がはるかましでも有ふかと、母ゝ案じをかけさせぬ、虚
言八百はへくんの足ぬ節季の斷譯を、いふ下稽古やこれあるべし
うそとい知れど老の身は子ゝ従がふがあらいぞと、機嫌よげようなづ
き、それ聞て落付きました、落付ぬは娘が事、此間も親方が、おしゆんを
預よきて云しやるゝは、傳兵衛殿といふ客の事でちと内ゝおかれぬ
事が有る、たとへ傳兵衛が尋てござるども、おしゆんが歸つてゐる事の
包み隠さねばあらぬぞやとくれゝも云しやつた、わしも其入わけ
を聞たゆへ、おしゆんが心根を思ひやり、思はず涙が、火をともしと
棚のすみ、こてく、取り出す行燈の、火かげもゝるゝ緩簾を、おしゆん
く、とへんじもしはくゝと、思ひ惱し顔容、こゝへど小聲あり

門の戸にかけて有、見る人も聞く人もない、ほふとで噂を聞くも、此間の川原の喧嘩の、殺人の、わがみの客の傳兵衛殿なれど大恩うけた久八と云者が代に捕れていたげだが、其場又落て有つた小柄が、傳兵衛殿がお屋敷から、拜領した小柄じやゆへ、天命通ずる詮議最中、なれ共、其夜から傳兵衛の行衛もしれず、其相方の女郎はおしゆんといふ事お上りもよふに、どんじで親方の方へもいろと詮議があれど、是も行衛がしれぬと云ひ切つて、今もめてある最中じやど、どりと噂評判、おりやもふ聞たびよびくくすると、聞ほと迫る、おしゆんが胸、其夜のおこりも皆おしゆへ、どこよとふしてござるやら、心もとあさ逢たさも、言ふよいわれぬ此場のまき、いかと胸も塞りし母は一途な娘の可愛さ、おしゆん、なんも案じる事はない、まかしつきつめたおと氣で、ひよつとこちらのうちへきて、刃物さんまいでもまやせまいかと、四五日の

夜のめもろくも寝られぬまゝの物あんじ、世間またんとあるかくな心中やあどしてくれたら、此母の目かいに見へず、あゝあのやうあひくびやうもの、もしもの事が有たらばあとで母はどうしやうぞ、袖乞いものもらひもあるいてもうりやもふひつとつも厭やせぬけれど、そあたの躰からだもきよじでも有つたら、おりやもすぐ死でしまふぞや、若い氣よあどさき思はず、義理ぎりじや、人のおちめを見捨ていと、つまらぬ義理をたてぬいてとしよりの此は、つらひめ見せてたもんなやど、可愛かわいは餘る親心おやこころ、あむあみだぶつも涙聲なみだこゑ、兄もども、こゝろおしゆん、今母のいけるゝとをり、何の義理もへちまもいらぬ、どいてしまへばあかの他人、またおれも氣よかゝつて、好の飯めしさへ喉のどへ通とほらぬ母じや人の氣休め、儼げんがはらたすけじやと思ふて、どいてたも、やゝ頼たのむゝと正直一ぺん、母の心ど兄の言葉、勿体あいと思へども、切きれぬ胸むねのうち、所詮しな死ね

パならぬ身の、此場をぬけて其上でと心ひとつゝ思案をきりぬ同く、
兄様お二人のお言葉よう合點がてんいたしました、殊こと又傳兵衛様、つい一通
りであふた客、深い譯わけでもないわいな、まかしつとめのならいにて、人の
おちめを見ずてゐるを、さとの耻辱ちやうとくとするいふこともすへのつまらぬ事
わしや得心をさせまして、品よふ譯わけのたつやうよ、國く其やうよわけ立
るといやつても、あつちよ得心とくしんせぬ時、それくいゝがけの駄賃だちん馬で
踏殺ふみころし、イくむり殺しよしやうもまねぬ、ヨリめつたよかみ合されぬ、兄
の云やるとをりじや、そなたよ怪我けがでも有て、傳兵衛殿とやらも難儀なんぎ
思ひきるのがあつちのため、わがみよ心引されて、つい捕へられるの
まれた事、退狀のさじやうをやつたらそなたの事も思ひ切て、される共く、遠い國
へでも影かげを匿かくしたら身を遁のがれまいものでもない、レくむつかしがる共
ひと筆、兄硯箱すゐりばこ取てやりや、サはやふくと母と兄、言葉よひなも泣顔なみがはを、

かくす硯すゐりの海山うみと、重かさなる思ひのべ紙しと筆ふでのたてどのあどやさき涙なみだも
墨すみのよじみがちなる胸むねのうち書残かきこすとい露つゆしらぬ、與次郎よじらうが傍そばから、コレ
其やうよあがたらしう書ず共、ついとさますと書ても濟すみそふあ事じや
い、書たものいあどくまで残のこる物男ものおの去狀きさうと同じ事、とつくりと譯
のわかるやうよ書てやるがよいや、い、此狀このさうよとつくりと、は合點あての
ゆくやうよ、あゝ様、此みおまへから、お渡しあされて、よし、此狀このさうさへ
あれば千人力せんにんりきじや、い、母じや人も落つかしやれ、どやかう云内いん九つま
へ、おまへも與あやでもふ寐ねやしやんせ、い、今夜こそゆつくりと心よふ寢ね
るであろ兄もろあたまそこよ寢ねやどおくそこもあき隔へだてを、押明おしあけて
こり入いる、い、おしゆん、こちらもこしよ、あうじやういたそ、い、おし
ゆんが共ともよ、暫しばし此世このよを假滞團薄かりよどんうすき親子ちんしの契ちぎりやど、枕まくらよ傳つとふ露涙つるみだ、夢
の浮世うきよと諦あきらめ、ふけゆくかねも哀添あわれそよころ、傾しも師走しわす十五夜の、月のさゆ

れど胸むねの闇やみすぎし別れの云いかぬし死しなべしよと傳兵衛が、忍姿しのぶすがたのしよ
んぼりど、イたむ軒のきの目覺への慥たしかよこゝと門の戸へさなるあいつの咳拂せきばら
い、聞きよふしゆんとびたうの飛立思ひ、上る枕まくらもちちはづす、與次郎の側そばよ高閑心たかいびき
もどもよ行燈あんどうの、どもしび吹滅ふきけしさし足み、心せくほど明きかねる、戸口
のかけがね表おもても、ふしゆんじやないか、傳兵衛様よふ逢あいよきて下さん
したと、云い聲こゑ寝耳ねみみよ與次郎が憐びつくり起おきると明る門の口妹いもとが姿すがたも暗くらまぎれ、
とらへる袖そでの振合ふあせおしゆんと心へ傳兵衛をむりよ引こむ取り違ちがへ、
戸口を内からびつしやり引立ひきた、こゝろつきよ來おつたぞ、おしゆんかな
ら、せ外へ出まいぞや、戸口のおれが押おしへている、門よゐるの傳兵衛じや、
おのれを入れてよいものかど、いふもがたゝ、胴震どうぶるい、コレコレ兄様ナニ、わしや
表おもてよゐるのい、何じや表よゐるのいあ、其そのこの色おいてくれ、そんなこ
と喰くおれじやないわい、母じや人ゝ、傳兵衛がおしゆんを殺しよきた

ゆへ今表へ、立て出した、おれ一人では手が廻らぬ、こなたも加勢して下され、かせい／＼／＼と、うろ／＼／＼うろたへ騒ぎ、母親も、何じや傳兵衛のかせい、／＼／＼ほか／＼同類でも有るのかと探り寄たる傳兵衛がそば、／＼おしゆん、ふるふ事／＼あい、兄や母が付てゐる、氣を静みやと撫さする背中の手ざはり合點ゆかず、／＼與次郎、どふやら娘でない様な、闇がり紛／＼さいもくがまざりやせぬか、こなたつかまへて居て下されやと探る手先／＼火打箱、がち／＼ふるふ、付木の光り、／＼妹じやあい、傳兵衛じや、おふくろあゝ、面目もあい此姿と、猶も小隅／＼屈みゐる、／＼其やう／＼しほ／＼して見せて、おいらを欺して、おしゆんを突ふとするのか、其手の喰ぬと懷か一通取出し、／＼ながら傍／＼寄り、傳兵衛、おしゆんと我と手が切れぬと、科人のわれじや／＼よつて妹迄難義する、それでさつき／＼妹／＼得心さして、とき狀が書して有、是を見い、これ

じやよよつて、^{モウ}かしゆんが方よ殘心けの離れて有るはい、^{ム、スリヤ}お俊
が其のき狀を、^{コリヤ}どき狀じや、^エ其心どの知らず、云かいした詞を誠
と思ふて、^{ミヤ}迷ふて、來たが無念^{むねん}あにい、口惜いと齒^はを喰^{くい}しる男泣、恨^{うらみ}を聞
くもへだゝる戸口、心いそうじやないじやくり、^{ア、}さぞ腹がたと道理じ
や、^コどつくりと氣をしづめて退狀を見て下さんせ、うれでよい、
長ふ物いやんな屑^{くず}が出るぞ傳兵衛、おれが讀^{よん}で聞したふても、かいもく、
おれは祐筆^{ゆうしつ}じや、^{サア}くはやふと封^{ふう}じめ切り、突^{つき}付られて目またまる、涙を
拂^{はら}い、^{ナニ}書置^{かき}の事ヤなんじや書置、^{コレ}く兄^{あに}正直^{しやうじき}を、吃驚^{びっくり}する事はあい、そあ
たの無筆^{むひつ}私^{わし}の盲者^{めくら}、書置じやと讀^{よみ}違へ、狼狽^{ろうた}さして門へ出て、娘を存分よ
せうどの工^{たくみ}そんお虚言^{うそ}の喰^{くい}ませね、^{サア}くほんまに讀^{よみ}つしやれ、^{コレ}く與次
郎表^{ちやうへ}の娘に氣を付て、門の戸をあきやんおや、^{ア、}吞込^{のみこん}である、こゝよ、お
れがへたばり付てゐる、^{サア}早ふ讀め、物こそいよふ書ね、聞^きく事、無筆ぞ

やないはいさく讀だく、是迄のほやういく、うみ山もたとへがたき
親のほおん、とさらふじゆうあるほ身のうへ何とぞ、玄ゆびよふつとめ
そのがれ、世をらくよ過させましひん、せめてすこしのほ思ほうじ、孝
行のかたはしよもなりひん、とそれのみ朝夕いのり、處、二世迄と
云かはら、傳兵衛様思はず此度のほ身のおんも皆われゆへよひへ
ば、今さら見ておいて、女のだ立やすずひ、不孝とい思ひながらともよ
かくをきはめ、母じや人どうやら風が變てきた様、わしも
胸がどきくと、くあとを讀で下され、さきほど傳兵衛様退狀とすて
した、めしは此事やし上たきまゝのきじやうといつはりかきのこし
ら、何事もくせんせよりのさだまり事とほあきらめ下されひ、上
たきかづくはふでよもつくしがたくひへ共、心せくましや入れ、
綴はそふした心かど驚く傳兵衛親子のうろ、氣遣お、兄や、娘を

内へ早ふくと、母があせれば與次郎も、戸口をあくれば走り行妹を無理も四人が顔見合してためいきつき涙は更も別ちなく、おんど言葉も傳兵衛が泣目を拭い、一旦言かはした言葉をたて、共も死ふと覺悟して、義理を立ぬくそあたの貞節忘はせぬ嬉いぞや、思ひまはせば廻す程、われこそ死なで叶はぬ身、そなたは科のあい身の上、共も死んではお二人の歎命ながらへあき跡の、とい吊ひを頼むぞと、言葉もわつと泣出し、そりや聞へませぬ傳兵衛様、お言葉むりとい思はねど、そもあいかゝる始めより末のすへまで云かはし、互も胸をあかしあい、何の遠慮も内證の、世話しられても思ふきぬ、ほんの女夫と思ふ物大事のく、夫の難儀命の際も振捨て女の道が立つものか、不孝とも悪人とも、思ひ諦め、コレ一所も死して下さんせと、かくせし刺刀取り直す、て、まて待おれや、コレ死ると命があいぞよ、何の事じやとんどわからぬやうなつてきた

はい殺しよ來たと思ふた傳兵衛殿も、今でいわれが方が手強ふあつた
ぞよ、ミヤヤどふしたらよからふろと、いふもゐろく母親も、そふじや、
わが子が可愛くど、子ゆへの闇あわきひら見ず、是迄おしゆんがお世
話あつた恩も義理も辨へず、一途中を引き別ふと思ふた母の義理
知らず賤しひとつめする身でも女の道を立て通す、娘の手前面目あい、
うなたの心も耻入て何事も云いませぬ、傳兵衛様と一所の、死出の
道連しやいのふ、またがこや傳兵衛様定めて親は様たちもござりませ
ふが、親の心といふ物の人間ゐるか譬鳥類畜類でも、子の可愛さよか
りりはあいもの、おしゆん傳兵衛といひす氣か、もしやおまへが死しや
つたど親はたちが聞かしやつたら悲うてく此世も殘つてゐる氣の
あるまい、いづくいかある國のはて、山の奥も身を忍び、どふぞ遁て下
さりませ、娘が心も耻入て天も地もかけがへあい、可愛我子をえん

ちうよ合點えてやる親心、この道理を聞き分て、おがみ拜ます、頼ますと手を合したる母親の子ゆへ迷ふ闇の闇、二人は何と言葉さへ、涙なみだは涙むすぼるゝ、血筋ちすぢの別わかれ與次郎も涙の雨の古布子袖ふるぬのこそでくいまぱりしやくり泣きなみだ、傳兵衛様の歎かえやるも道理じや、又おえゆんの泣きやるも道理じや、母じや人の泣かしやるも猶道理じや、道理じや、だうりくといふていねからはからいつまでもわからぬ道理じや、がコレ二人おがら母じや人の今の言葉は合點がまいましたか、エ、コレわれも得心してくれたか、がてんがいたか、エ、合點したらば、どうぞ此場を立退のふんべつ、まかし其容そらでい人目めまたつ京の町を離はなれるまで、此編笠あみがさは顔隠かくし幸の猿さるまにしめで二人が末永すえながふめでたふ女夫めうとふありとげる、門出いの祝ひも此與次郎がおはつ徳兵衛が祝言しうげんの壽ことよきこあた衆も別れの盃い、祝言しうげんの盃いと祝唄いわうたふも聲低こへびくよ、おさるいめでたやな、むこ入姿すがたものつまりとく、

「さりとて、有るかい、さんか又有かいな、徳兵衛様がござんせ餘りな様が來やうが遅いよ依て、おはつ様の顔眞赤として腹立てぬやんすいのふ、お初様、御様が盃をしたいといのふ、機嫌直して盃を頂かんせ、いたゞくのふ盃を、さんか又有かいあ、むて様、足で盃をさすあまり難面、夫で嫁が頂かんせぬはいのふ、ひづらずとほんまゝさしてやらんせ、うふじや、そこでお初がいたゞいた物じや、いただくのふ盃をさんか又有かいな、嫁の晝寝もころりどせい、あるかいあ、さんか又有かいな、むて様、あまりつれふさんすよよつて、おしゆんよめで様が起さんせぬわいのふ、そこらでちよつとおこしたり、あるかいあ、さんか又有かいあ、おきたらたがひよだきつきやれ、うれできげんが直つたぞ、あるかいあ、さんか又有かいあ、くるりどかへつて立たりな、たつてくれ、立し

やませ、ついで日ひ和なごを見てたもれよい女おんなぼうじやよくあるかい
あ、さんあまたあるかいな、日ひよりを見たら、落おてたも、く、そふじや
く、おさるいめでたやめでたやあ、くきりく、此家このやをさるまいしま
さるめでたふいつまでも、命いのち全まふしてたもど、目めいみへねども、見送みおく母、言
葉はなも此世このよで聞きおさめ、ころの、うちの暇ひま乞こあすの噂うわさど、なりふりもやつ、
姿すがたの女夫めうとづれ、名なを繪艸えそうし紙しよしやうごぬんもりを、あてど、たどりゆく

○下の巻 道行涙のあみ笠

あま中なかつに染そめて眞紅しんくの縫ぬいれ糸いと、むそぼれしよりえら糸いとの昔むかしを忍しのぶ世よのう
さや、今いま浮名うきなも、たちばあの花はなの姿すがたもいつしか、しほれがちなる目めよ
もろき、露つゆの命いのちと消きへ行い、深ふかき契ちぎりの傳兵衛でんべゑい、おしゆんを連つれて遠近えんちんのた
つ木きもしらぬ夜よるの道みち、あどやさきなる縫ぬいれ髪かみむすぼれそめし縁えんのはし
人目ひとめを包つつ、編笠むらさきも姿すがたはやつし縫かれども、心こころのせいしいつまでも、かいらじ

ものと手を取て、心細くもたゞ二人、すぎし廓のきぬぐみ、ねくられし
といひ引替て、我ゆへかゝる、身とありて、智慧も、器量も、身代も、みな淡雪と
消失て、かはせし事のかづゝも切るゝきられぬ中くゝもしがらむ縁
のいとしやと、云へば傳兵衛身を悔み、人への氣やすめと、猿廻しと姿
をかへ、堀川を落てゐ來れども、人を殺した我身の上、存へる心のあいそ
なたはあどゝ生残り、母に孝行盡してたも、いんでたも、コレ傳兵衛さん
そりやだうよくあ、氣の悪い、かゝさんや、あゝさんゝも、かへぬおまへを
先立て、生てゐるふな、わたしじやと思てかいあぐちあぞへ、死なばいつ
しよと云あがら、世も尊き靈場の森の中よて死るあら回向のかづゝ
後の世の闇も照さんてなたへど、手を引立て行空の星も逢瀬の、天の川、
それゝゝあらでおりびめの錦の小路綾もなく、過るむかいゝちらくゝ
と、見ゆる火かげの、成願寺嵐ゝさゆる鐘の聲なまいだあひあみだ、世は

さだめあや去年こぞの秋閨ねやのそきまの、小夜あらし、よい月と眺ながめてし今宵こよ
の二人月影かげも、おもてはづかし此姿すがたわたしももとい、突出つきしのふと逢染あひそめ
し戀こひのたね、儘ままあらぬ浮世うきよや、おいとしひ此姿すがたわしと云ものあいさ
らばお内儀ないぎさんを呼迎よびむかへ、中なかつようそふてござんじよと思ひ廻まわせば、勿体なあ
い、誓文せいもんわたしや未來みらいでもあたを退うけて浮氣うわきいあい二世も三世も其
先さきまでもどふした因果いんぐわの縁えんじややら堪忍かんじんしてと斗ばかりよてわつとひれ
伏た、泣な、沈しづむ、つゆのよこがほ、吹ふかひし、帶おびのしやらどけ引しめて、よしや歎なげ
かじいろゆへの、うさもつらさも、猿廻さるまわおさるためでたやあ、むこいりす
がたものつしりとく、こしはりといく、あるかいあ、さんなまたある
かいな、またとあるまいふたりが中、なみだたがやすはたけ道、よげ来る
二人、ねいくる二人いどみあらそふ人かげの、夜の目よそれとちいうう
も、さだかよ見へぬさりの中、見へつかくれつ、かくれあき、二人が中はさ

くら木ふちりばめられて唄われて色のわけしり戀しりと、あだ名残すがあきあど迄も、はんにせめての思ひ出でと、なぐさめられつ、あぐさめつ、行も涙の道もせや、二人が命はかあくも森の、こあたゝ着よける

○せうご院の段

こあたの畑道いつさんゝ逃來る勘藏其あどより、同く走つて万八も、吐息つきくあふない、ひよんあ所で出くはしたる瀧口左内め、又井箇屋の、手代十助めも力強、なかく手ゝあふ奴等でいあい、何でもおしゆん傳兵衛二人のやつら、引捕へて呉んと、思の外の今宵の仕儀、さてさてひとめ逢た、此万八が、體いふかた紛ゝあつた、よもやこゝまで追かけても來はせまい、つかまへられていむつかしひ、息休めと芝のうへへ、だがる後の廻のかげより、ぞつと出たる手代十助隠せし挑灯差揚れば、吃驚しあがら顔打ながめ、あのれい手代の十助じや

な、二人とも動まい、最前惜ひ所を取り逃して、是迄跡追へて來た、此處で逢たが百年め、傳兵衛様の難儀も似金も、おのれらが皆仕業、かたつばし引つ縛つて、ぐつと詮議を仕拔のじや、ホ、チカスあるから、こつちも死も狂ひ、それ万八、心得たもふやけむちや、締殺せ、してこいと右と左、万八勘藏むしやぶり付を、心得二人をこてかへし、又組付くをすくい、投挑灯消て眞闇がり、それがどれやら當途おく聲を、しるべ、掴つき、投つ投げられこんくらべ、逃れ、追かけ追戻し堤をすべつてころく、落てはあがりあがれば、おち、命限りと掴み合ふ、斯どもしたより、弓張挑灯、火かげゝそかして、テ、十助、左内が來た氣遣、おいと、いふ聲聞て驚く、万八、落散雪駄、かいつかみ挑灯へ、ばづたり當てれば、火の消へて、俄、闇の心地する、煙を傳ふて、逃出す二人、何國までもとおつかくるこなたの、りい、まんく、と、傳兵衛のかたへ、座をしめ、これが我々が、露の命の

捨どころ、書かきふく事も云ふ事も、もふ此だんゝの皆みな繰言くりごと、二人手ゝ手をと
りかひし、死し出で三途さんづを伴ともわん、心強こづく死でたもど、涙なみだあがらゝ進すすれバ、お俊しゅん
も涙なみだ又また聲こゑくもり嬉うれうござんを傳兵衛さん、夫それがあゝの世の樂たのしみをもふ今生こんじやう
の言ことひおさめ、女房にようばうれしゆんど唯一言たひひとこと、いふて殺ころして下くださんせ、わたしも
こちらの旦那だんなどの、傳兵衛さんといふわいおと膝ひざもたれて泣なきくどく、
ア愚おろかな事ことばかり、逢染あいろた其晚ばんから、互たがひもほんの女夫にようふじやど、約束やくそくしたゝ違ちが
ひひおい、かくなり果はつるとしらずして、我命たすを助たすけんど、久八くはちが身み又また覺おぼえ
き人殺ころしとあつての、獄舍ごくやの住すまい憂うれき苦くるみ、親人おやもお歎なげかけ、現世げんせの罪つみ又また罪つみ
重かさね、來世らいせのくげんも恐おそろしい親おやの恩おんを忘わすれため、家いえの定紋じやうもんの小こそで
血ち沙しほ又また汚けがさじと、どあるかたへよあをし置おき、夜よが明あてゝ耻はじのうぬ
り、此傳兵衛を不ふ慙びんが餘あまつてより、そあたを請出うけだし添そせんどの、親人おやの
情思なさけひかけおく其晚ばん、事ことを仕出しだせし河原かわらの喧嘩けんか、詮方せんかたなさゝ、官左衛門

を切殺したる身の災難、不孝よふかう重ねたる我身のうへ、是迄不孝の
詫言や、暇乞よ、拜むばかり、そなたも堀川の親兄へ、暇乞して禮云やど
心を付けられ身をふるひし、忘れてゐたものを、ひよんお事言ひ出し
て、また泣て下さんすか、宵は別れて出るまでも、いがある國のはて、山の
奥よも身を忍び、どふぞ遁れて夫婦となり、無事で暮せどか、様の、のた
まいしよ、明日の死だど沙汰あらば、さぞや母様兄さんの、歎給ひん、お命
も續まいと、案じられそれが悲い、とわつとばかり、取亂し前後生
体あかりしが、やう／＼涙ふしゑづめ、あれいむかふのあかい、夜
の明けるのじやあいかいな、あれは、さいの墓所、亡者を葬る火の光
あかじ人と生ても、疊の上で死だ身は、あどのあどまであのをうゑ、葬む
らるゝもあるものを、都の中でも指折の、町人の子があさましひ、見苦し
う死だ體を街たよさらされ、あと／＼までも、耻をさらしのながら川、水

の流ど、いひあがら、人間の身の船は似て、心のふかふさかぢどりの、悪い
ばかりで末の世まで、因果の業をはたさぬかと、悔み歎く、もつとも
抱合たるもろ涙、もりの葉落やひたすらん、はや明がたの、どりのこへ、こ
こより無情の使いかど、心せかれて死用意、どりと急ぐ其所へ、一もん
じは驅け来る與次郎、南無三ぼうと退出すを、兩手は取付き殺さぬく
もふ殺さぬろ、かふあらふとおもふたゆへ、ほうと尋ね歩行たやう
すがある、といふ聲もいきざれしたるうしろより瀧口左内喜左衛門を
同道し勘藏万八に繩をかけ十助は引立させ、早まるまい兩人横淵官
左衛門の役柄よて自由を働き、是迄殿の用金を掠遣ひ多くの用金を
引負えたる條明白は死後露見及び不屈たる旨おどがめつよくき
やつ死ぞん殺しとくこれある万八勘藏もかれが手さきをばたらき
似金までつかひしえさい惡事のだんくいち、白狀彼等を直に代官

所へ引き渡し、久八が^{しやうろ}出牢をねがふばかり安堵せよ傳兵衛と、言葉の中
より喜左衛門、^調おしゆん、直も身請して波風もなく事すんでおさまる
家の花嫁と^{よめ}呼迎へん、喜べと聞てみなく、勇^{いさみ}たち親のお慈悲とありが
た涙、嬉し涙は喜びをかさね重ぬる千代八千代、羽をのそ、鶴や龜山は、音
に絶せぬ瀧口が、仁あり義有り道を立て、運も開くる傳兵衛おしゆん昔
よかへる其噂、目出度末の代と迄も筆も任て書残す

傳兵衛 近頃河原の達引終

明治廿五年七月廿四日印刷
明治廿五年七月廿五日出版

翻刻兼
發行

內藤加我

日本橋區通四丁目四番地

印刷者 瀧川三代太郎

日本橋區新和泉町一番地

發兌 金櫻堂

日本橋區通四丁目四番地

